

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第575集

や ま さわ こま ごめ
八木沢駒込 II 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

2011

国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所
(財) 岩手県文化振興事業団

八木沢駒込 II 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査



和鏡「秋草飛鳥鏡」



和鏡「秋草飛鳥鏡」裏



和鏡「秋草飛鳥鏡」裏

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に関連して、平成19年度から平成21年度の3か年にわたり発掘調査された宮古市駒込Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、八木沢駒込Ⅱ遺跡では、縄文時代中期の竪穴住居跡・土坑・階級穴状造構などが検出され、当時の場の使い分けを知ることができる貴重な資料を得ることができました。また、12世紀の和鏡や削金具などが出土し、当地における12世紀の平泉藤原氏の文化の広がりを考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成23年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駒込40ほかに所在する八木沢駒込II遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される八木沢駒込II遺跡の遺跡番号と遺跡略号は、次のとおりである。
　　遺跡番号　L G43-1244
　　遺跡略号　Y G K II -07 (平成19年度調査)、Y G K II -08 (平成20年度調査)、Y G K II -09 (平成21年度調査)
- 4 発掘調査の調査面積・期間・担当者は、次のとおりである。
　　平成19年度　1,900m²／平成19年10月30日～12月5日／阿部勝則・八重畠ちか子
　　平成20年度　2,800m²／平成20年11月4日～11月27日／阿部勝則・菅野　梢
　　平成21年度　3,600m²／平成21年5月25日～7月3日／杉沢昭太郎・菅野　梢
- 5 室内整理の期間・担当者は次のとおりである。
　　平成19年度　平成20年2月1日～平成20年2月29日／阿部勝則・八重畠ちか子
　　平成20年度　平成21年3月2日～平成21年3月31日／阿部勝則・菅野　梢
　　平成21年度　平成22年1月16日～平成22年3月31日／杉沢昭太郎・菅野　梢
- 6 野外調査における基準点測量・写真撮影にあたっては、次の機関に委託した。
　　基準点測量：釜石測量設計株式会社、空中写真撮影：東邦航空株式会社
- 7 遺物の分析・鑑定にあたっては、次の機関に委託した。
　　石材鑑定：花崗岩研究会、炭化材樹種鑑定：岩手県木炭協会
　　放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所、火山灰の分析調査：パリノ・サーヴェイ株式会社
　　金属製品の分析・保存処理：(財)元興寺文化財研究所
　　金属製品(和鏡・鏡金具)及び織維質の遺物の鑑定：久保智康(京都国立博物館)
- 8 発掘・整理・報告にあたっては、次の方々にご指導・ご協力いただいた(順不同・敬称略)。
　　斎藤邦雄・佐藤嘉広・菅　常久・櫻井友梓(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課)、竹下将男・高橋憲太郎・鎌田祐二・加納由美・安原　誠・長谷川真・阿部　豊(宮古市教育委員会)、安達尊伸(田野畠村教育委員会)、川向禎子(山田町教育委員会)、井上雅孝(滝沢村教育委員会)、久保智康(京都国立博物館)、本澤慎輔・八重樋忠郎(平泉町)、及川　司・菅原計二(平泉町教育委員会)
- 9 本報告書の執筆は、I章調査に至る経過は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所に原稿を依頼した。II章～VI章は、阿部・杉沢が執筆した。報告書の編集・校正は阿部・杉沢が行った。
- 10 本遺跡の調査成果は、後に『平成19年度発掘調査報告書』(岩文振第524集)、および『平成20年度発掘調査報告書』(岩文振第546集)『平成21年度発掘調査報告書』(岩文振第571集)に発表しているが、本書の内容が優先するものである。
- 11 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1 掲載図版等について

(1) 掲載図版の構成

図版構成は、遺構・遺物に分けています。遺構図版は、堅穴住居跡・土坑・陥し穴状遺構・柱穴状土坑の順で種類毎に掲載した。遺物図版は土器・石器・陶磁器・金属製品・銭貨・鉄滓類・自然遺物の順に出土遺物の種類毎に図版を作成し、出土地点・層位（上→下）を基準に掲載した。別に出土地点別の遺物集成図も作成している。遺物の掲載番号は、掲載順に連番とし、図版・写真図版とも同一番号とした。掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の()内の数値は残存値である。

(2) 掲載図版の縮尺

掲載図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。

a 遺構図版

住居跡の平・断面図：1/50、炉跡の平・断面図：1/50、陥し穴状遺構・土坑の平・断面図：1/40、焼土遺構・土器埋設遺構：1/30、炭窯跡の平・断面図：1/60。

b 遺物図版

土器：1/3、土製品1/2、剥片石器：1/2、礫石器：1/3、石製品：1/2、陶磁器：1/3、鉄製品：1/3。

c 写真図版

遺構の写真図版の縮尺は不定である。遺物の写真図版の縮尺は、概ね図版と同一縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。

(3) 図版の凡例

図中に使用した記号と網かけの凡例は以下のとおりである。それ以外については、個々の図版毎に凡例を示している。

〈遺構〉



目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	3
1 遺跡の位置と立地	3
2 歴史的環境	3
3 基本層序	5
III 調査・整理の方法	7
1 野外調査	7
2 室内整理	10
IV 平成19年度調査の成果	12
1 検出遺構	12
(1) 検出遺構の概要	12
(2) 坪穴住居跡	12
(3) 土坑	13
(4) 陥し穴状遺構	17
(5) 落ち込み	20
(6) 柱穴状土坑	21
2 出土遺物	35
(1) 出土遺物の概要	35
(2) 繩文土器	35
(3) 石器	35
(4) 陶磁器	35
(5) 金属製品	35
(6) 銭貨	35
(7) 鉄滓類	35
(8) 炭化材	35
3 まとめ	40
(1) 遺構	40
(2) 遺物	40
(3) おわりに	40
V 平成20年度調査の成果	41
1 検出遺構	41
(1) 検出遺構の概要	41
(2) 土坑	41
2 出土遺物	45
(1) 出土遺物の概要	45
(2) 繩文土器	45
(3) 金属製品	45

(4) 繊維質の遺物	45
3まとめ	47
(1) 遺構	47
(2) 遺物	47
(3) おわりに	47
VII 平成21年度調査の成果	
1 検出遺構	49
(1) 平成21年度調査区の概要	49
(2) 土坑	49
(3) 低位面	49
2 出土遺物	49
3まとめ	49
VIII 分析・鑑定	53
1 放射性炭素年代測定(平成19年度調査)	53
2 火山灰分析(平成19年度調査)	56
3 金属製品・繊維質の遺物の成分分析(平成20年度調査)	60
報告書抄録	89

図版目次

<平成19年度調査>	
第1図 岩手県全国	1
第2図 遺跡周辺地形分類図	2
第3図 周辺の遺跡分布図	4
第4図 遺構配置図(全体図)	23
第5図 遺構配置図(部分図)	24
第6図 S I 01堅穴住居跡	25
第7図 S I 02堅穴住居跡	26
第8図 S K01~04・09・10・12・18十坑	27
第9図 S K14・19土坑	28
第10図 S K05・06陥し穴状遺構	29
第11図 S K07・08陥し穴状遺構	30
第12図 S K11・13陥し穴状遺構	31
第13図 S K15~17陥し穴状遺構	32
第14図 S X 01落ち込み	33
第15図 柱穴状土坑	34
第16図 土器	38
第17図 石器、陶器、金属製品、錢貨	39
<平成20年度調査>	
第18図 遺構配置図(1)	43
第19図 遺構配置図(2)、S K20十坑	44
第20図 土器、金属製品	46
第21図 和鏡、鏡金具関連資料	48
<平成21年度調査>	
第22図 出土遺物	50
第23図 平成21年度調査区全図	51
第24図 トレンチ断面、土坑	52

表 目 次

<平成19年度調査>	
第1表 周辺遺跡一覧	6
第2表 垂穴住居跡観察表	22
第3表 土坑観察表	22
第4表 陥し穴状遺構観察表	22
第5表 出土地点別土器重量表	36
第6表 遺構別出土遺物一覧表	36
第7表 土器観察表	36
第8表 石器観察表	37
第9表 石材略号一覧表	37
第10表 產地等略号一覧表	37
第11表 陶磁器観察表	37
<平成20年度調査>	
第13表 銀貨観察表	37
第14表 鉄滓類観察表	37
第15表 炭化材観察表	37
第16表 トレンチ一覧表	42
第17表 上坑観察表	42
第18表 出土地点別土器重量表	42
第19表 土器観察表	46
第20表 金属製品観察表	46
第21表 繊維質の遺物観察表	87

写真図版目次

<平成19年度調査>	
写真図版1 調査区全景	70
写真図版2 調査区の様子	71
写真図版3 基本土層、トレンチ	72
写真図版4 S I 01垂穴住居跡	73
写真図版5 S I 02垂穴住居跡	74
写真図版6 S K01~04土坑	75
写真図版7 S K09・10・12・14(1)土坑	76
写真図版8 S K14(2)・18・19土坑	77
写真図版9 S K05~08陥し穴状遺構	78
写真図版10 S K11・13・15(1)陥し穴状遺構	79
<平成20年度調査>	
写真図版14 調査区全景(1)	83
写真図版15 調査区全景(2)、調査前現況(1)	84
写真図版16 調査区現況(2)、基本土層、S K20上坑	85
写真図版17 土器・金属製品、繊維質の物質	86
<平成21年度調査>	
写真図版18 山頂部、斜面部	87
写真図版19 谷部ほか、出土遺物	88
写真図版11 S K15(2)・16・17陥し穴状遺構、 S X01落ち込み	80
写真図版12 土器	81
写真図版13 石器、陶磁器、金属製品、鉄滓類	82

I 調査に至る経過

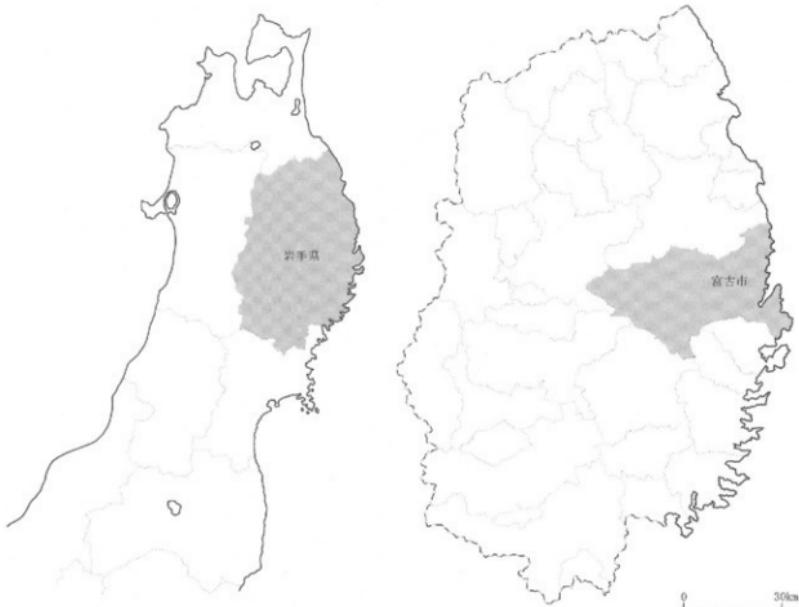
八木沢駒込Ⅱ遺跡は、一般国道45号宮古道路の工事区域内に位置しているため、当該事業の施工に伴い、発掘調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号線の線形不良及び隘路個所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

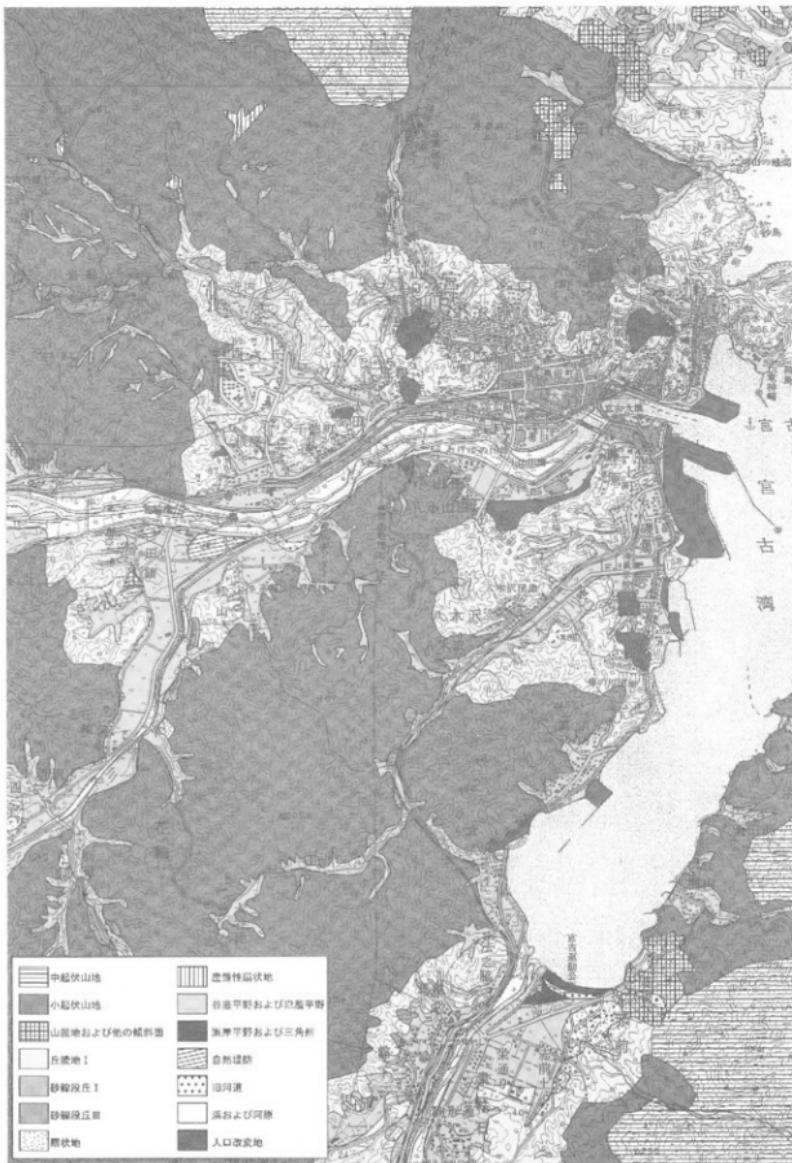
これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成17年7月15日～11月15日にわたり試掘調査を行い、平成17年12月12日付「教生第1338号」により、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答がなされたものである。

その結果、本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡周辺地形分類図

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

八木沢駒込Ⅰ遺跡は、宮古市大字八木沢第8地割字駒込40ほかに所在し、JR東日本山田線磯鶴駅の南西約3.5km付近に位置する。調査区はこのうち東西方向へ樹枝状に延びる山地の尾根部とその間の谷部にかかる1,600m²である。標高は27~33mを測る。調査前は山林および畑地である。遺跡の中央部は北緯39度36分31秒、東経141度55分55秒付近にある。

遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁して太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる。北上山地中部の東側縁辺部の一端をなしている。平成17年6月6日に行われた新設合併により、北側に隣接していた田老町、西側に隣接していた新里村が、それぞれ宮古市と合併し、これによって宮古市は、北西を下閉伊郡岩泉町、南方を下閉伊郡山田町と境界を接することとなった（平成20年11月1日現在、市域面積696.82km²、推計人口57,578人）。宮古市周辺の海岸には、淨土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部で様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬があり組んだリアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ100mを超える海蝕崖が続いている箇所も見られる。

宮古市を流れる河川は、盛岡市と川井地区の境界にある区界跡付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川、長沢川、山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川。本遺跡の南東側を流れる八木沢川がそれぞれの低地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗岩～トーナル岩で占められ、磁鐵鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダメロ岩やディサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狹小な範囲に限定される傾向が見られる。標高100m以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿って見られ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帶状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶴西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的少ない標高300m以下の中起伏山地あるいは標高200m以下の小起伏山地である。

2 歴史的環境

遺跡の所在する宮古市には、多くの遺跡が確認されている。本節では旧宮古市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、遺跡周辺における歴史的環境について時代毎に概観する。

縄文・弥生時代

当地域における人々の活動が考古学的に確認できるのは、現段階では縄文時代早期からとされ、音ノ沢遺跡、小沢貝塚などが確認されている。縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地はその他にも存在するが、現段階では統じて詳細な様相が把握できる状況にはない。縄文時代前期に入ると遺跡の数は増加傾向となり、中期ではさらにその数を増す。該期の遺跡としては宮古市指定史跡磯鶴夷森貝塚や上村貝塚などが確認されている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認



第3図 周辺の遺跡分布図

されており、金浜Ⅰ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、隠里Ⅲ遺跡では、後期の土器が出土している。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。この遺跡では、薙手刀や直刀など鉄製武器類や和同開珎が出土している。県内における和同開珎の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。平安時代の遺跡は前代に比べると増加傾向にある。特に、集落において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、9世紀以降に当地域で鉄生産が本格的に始まったと考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。八木沢駒込Ⅰ遺跡の北東2kmに位置する島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。このほか、平成19年度に発掘調査が行われた隠里Ⅲ遺跡では平安時代の堅穴住居4棟とともに、住居状遺構9棟（鍛冶工房含む）、炭窯2基、火葬関連施設1基などが発見され、このうち堅穴住居、火葬関連施設から、沿岸北部では出土事例の稀な灰釉陶器片が出土している。

中世・近世

中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防衛的施設を有し、おもに閑伊氏・一戸千徳氏などの氏族が関係しているとされている。遺跡の周辺域では、松山館、千徳城、田鎮館、花輪館、鱒沢館が確認されている。また、前代から引き継ぎ、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は、城館跡であるとともに鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、黒森町遺跡では、鉄鑄物跡関連も確認されている。

地域的・歴史的特性

以上のように、八木沢駒込Ⅱ遺跡周辺には、縄文時代～中近世に至るまでの遺跡が数多く確認・調査されている。縄文時代においては、前期～後期の集落が多く、また沿岸地域という立地の特性から貝塚が多く確認されている。貝塚は有機質の遺物の残像状態が良好な場合が多く、貴重な情報を提供することが多い。したがって、縄文時代の海に関する生業や食生活を復元する有益な資料である。古代以降は鉄生産に関連する遺跡が多く確認されていることが特筆すべき事項である。これは花崗岩地帯に起因して、原料である砂鉄を多く産出する地域であるためであると考えられる。

3 基本層序

層序決定に際しては調査区内で層序の良好な場所を選んで基本層序の記録をとった。

第1表 周辺道路一覧

No.	道路名	時代	種別	No.	道路名	時代	種別
1	馬田Ⅱ	悠久・古代	集落跡・生産道路	42	松山大垣宿	古代	集落跡
2	馬田Ⅰ	平安	集落跡	43	尾里Ⅰ	縄文・古代	集落跡
3	坂動中谷地	縄文・古代	集落跡	44	尾里Ⅱ	縄文・古代	集落跡
4	八木武古築	中世	城跡跡	45	扇田Ⅲ	遠・古代	貿易路
5	福原堀山	縄文～近世	集落跡・放散跡・小向道跡	46	扇田Ⅳ	縄文・羽毛・古代	貿易路
6	高畠	縄文	土塁遺跡	47	破防竹原Ⅰ	平安	集落跡
7	寒風	縄文	集落跡	48	扇原上町Ⅱ	奈良	集落跡
8	当ノ沢	縄文・古代	集落跡	49	丸井地	縄文	集落跡・日暮
9	近内中村	縄文・弥生・古代	集落跡	50	小武田	縄文・古代	貿易
10	株ヶ沢Ⅰ	縄文・古代	集落跡	51	早坂	縄文・弥生・古代	貿易
11	近内石井Ⅰ	古代以降	製鉄道路	52	上村貞徳	西～平成	集落跡・貿易
12	近内大堀	中世	城跡跡	53	破防斎久森原Ⅱ	縄文・古代	門埋
13	赤堀	縄文・近世	集落跡	54	佐浜Ⅱ	縄文・平安	集落跡
14	山口物込Ⅰ	縄文・奈良	集落跡	55	花輪館	小世	城跡跡
15	山口物込Ⅱ	古代以降	集落跡	56	下所坂Ⅰ	中世	城跡跡
16	猿堤	縄文・心長・平安	集落跡	57	八木沢Ⅱ	縄文・古代・中世	集落跡
17	山口館	縄文・古代・小世	城跡跡・集落跡	58	八木沢Ⅲ	古代以降	生産道路
18	狩野幹	縄文	集落跡	59	八木沢新屋	小世・近世	城跡跡
19	瀬戸町Ⅰ	古墳	所敷跡・然御物製作跡	60	納波坂	中世	城跡跡
20	小伏賀駒	縄文	貿易	61	八木沢桃込Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産道路
21	佐原	縄文	集落跡	62	金森坂	中世	城跡跡
22	平松Ⅰ	縄文	集落跡	63	金森Ⅰ	縄文	敷布地
23	施野町	小世	番屋敷	64	金森Ⅱ	古代	集落跡
24	與々持郡山貝塚	縄文～小世	貝塚・集落跡・城跡跡	65	金森Ⅲ	縄文・古代	敷布地
25	芦戸・潤	縄文	集落跡	66	金森IV	縄文	敷布地
26	田舎蛇	中世	城跡跡	67	金森V	縄文	敷布地
27	墨印館	中世	城跡跡	68	今庭坂・沢	古代以降	城跡跡
28	下大谷地Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産道路	69	馬崎Ⅱ	古代	集落跡
29	千疋城	奈良・平安・小世	城跡跡・製鉄跡	70	山越館	小世	城跡跡
30	實望Ⅰ	縄文・平安	集落跡・製鉄跡	71	尾里	縄文・奈良	集落跡
31	實望Ⅱ	弥生・平安	集落跡	72	扇原館	中世	城跡跡
32	長根Ⅰ	弥生～中世	城跡跡	73	小瀬内Ⅰ	縄文・弥生・奈良	集落跡
33	扇原鉢場Ⅱ	縄文・金沢・平安	集落跡	74	赤浜Ⅲ	縄文・平安	集落跡
34	横堀Ⅰ	古代	集落跡	75	赤浜Ⅳ・八枚田	縄文・平安	集落跡
35	飛闘館	中世	城跡跡	76	赤堀館	中世	城跡跡
36	柄山	古代	集落跡・貿易	77	疊山貝塚	縄文	集落跡・貝塚
37	水戸井内Ⅱ	古代以降	生産道路	78	八木沢物込Ⅱ	縄文・古代	集落跡
38	水戸井内Ⅲ	弥生・古代以降	生産道路	79	八木沢新屋	縄文・古代	集落跡・生産道路
39	木戸井内西	縄文・古代・近世	集落跡・生産道路	80	妻の神	弥生・古代	生産道路
40	小山出所	中世	城跡跡・預鉄開拓遺跡	81	妻の神Ⅰ	縄文・古代	生産道路
41	板山館	古代・中世	城跡跡	82	妻の神Ⅱ	縄文・古代	生産道路

III 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割にあたっては、平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせた基準点・補点をもとにして、最終的な調査区全体にメッシュがかかるようにグリッドを設定した。設定した基準点・補点の座標は世界測地系であり、座標値は以下のとおりである。

①平成19年度調査

基準点1	X = -43100.000	Y = 94260.000	H = 37.466m
基準点2	X = -43100.000	Y = 94288.000	H = 36.715m
補 点1	X = -43120.000	Y = 94260.000	H = 38.881m
補 点2	X = -43120.000	Y = 94276.000	H = 37.745m
補 点3	X = -43140.000	Y = 94260.000	H = 47.167m
補 点4	X = -43140.000	Y = 94276.000	H = 50.846m

②平成20年度調査

基準点1	X = -43220.000	Y = 94244.000	H = 64.767m
基準点2	X = -43236.000	Y = 94244.000	H = 63.466m
補 点1	X = -43248.000	Y = 94264.000	H = 57.707m
補 点2	X = -43272.000	Y = 94264.000	H = 52.044m
補 点3	X = -43248.000	Y = 94280.000	H = 52.627m
補 点4	X = -43276.000	Y = 94280.000	H = 51.437m

③平成21年度調査

基準点1	X = -43215.000	Y = 94250.000	H = 63.868m
基準点2	X = -43150.000	Y = 94260.000	H = 49.703m

この基準点と補点を基準としてグリッドを設定した。原点（X = -43060.000、Y = 94220.000）を北西隅にして40m四方の大グリッドを設定し、さらに4m四方の小グリッドを設定した。グリッド名は、大グリッドは北から南に向かってI・II・III（ローマ数字）…、西から東に向かってA・B・C（アルファベット大文字）…とし、小グリッドは北から南に向かって1・2・3（アラビア数字）…、西から東に向かってa・b・c（アルファベット小文字）…とした。それぞれの組み合わせでI A 1 a・I B 1 bグリッドの区画名を付し、区画左上の杭で、その区画のグリッド名称を表した。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、検出順にそれぞれ番号を付けて、S I 01・S K 02のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。本調査で使用した遺構略号と遺構名は以下に記したとおりである。

S I : 壘穴住居跡、S K : 陥し穴状遺構・土坑、S X : その他

報告にあたっては、現場で命名した遺構名をそのまま使用しているため一部欠番を生じている。

1 野外調査

検出された遺構種別・検出数・遺構名は以下に記したとおりである。

①平成19年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

堅穴住居跡 2 棟：S I 01・02

土坑10基：S K01・02・03・04・09・10・12・14・18・19

陥し穴状遺構 9 基：S K05・06・07・08・11・13・15・16・17

その他 1 箇所：S X01

柱穴状土坑25基：P P 1～25

②平成20年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

土坑 1 基：S K20

③平成21年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

土坑 1 基：S K21

（3）試掘・粗掘と遺構検出

当初、幅1～2m、長さ5～10mのトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、上層の堆積状況を把握した。試掘溝の設定にあたっては、平成17年度の試掘調査の成果を考慮しながら、試掘溝を入れた。試掘の結果、急斜面地で遺構・遺物が存在する可能性が低いと判断された区域は、試掘調査のみで調査を終え、それ以外の区域においては、試掘にもとづいて表土掘削を行った。調査区全体の表土の厚さは20～30cmで、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行った。遺構検出は人力で行った。遺構検出は、尾根上はⅢ層黄褐色土層（一次検出）またはⅣ層マサ土層（二次検出）で行い、谷部ではⅡ層黒褐色土層（一次検出）またはⅢ層黄褐色土層（二次検出）で行った。

（4）精 査

検出された遺構は、原則として住居跡など大形の遺構の場合は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。陥し穴の底面で確認された副穴は、径が小さく深いことから、トレンチを設定して断面観察による記録を優先して作成した。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜、写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField・Cardを使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

（5）実測・写真撮影

平面実測はグリッドの基準線に合わせた1mメッシュを基準として行った。平面図・断面図の縮尺は堅穴住居跡・土坑類は1/20を基本として、マイラー用紙に記録した。レベルは、基準高をもとに絶対高で測った。なお、トレンチ位置図・個々の遺構平面図については、グリッド杭・水糸によって設けられた基準から計測する簡易遺り方測量ではなく、電子平板を用いて図化作業を行った。断面実測については、任意の高さを基に設定した水糸を基準として計測を行った。

写真撮影は、35mmモノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9cm判1台、補助用としてデジタルカメラ1台を使用して調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。また調査終了段階でセスナ飛行機による航空写真撮影を行った。

(6) 上層注記

断面図作成後に上層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』(1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著)をもとにしているが、締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎、の5段階で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然か人為かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字(I・II・III)、遺構内覆土をアラビア数字(1・2・3)で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、Ia・Ib・Ic・…などと表わした。

(7) 土壌水洗

縄文時代の住居跡・炉跡では、動物遺存体が存在する可能性、古代の住居跡や炉跡では、製鉄関連の遺構である可能性を考慮し、住居跡の覆土下位(床上3cm)の覆土・住居跡の炉跡の覆土及び焼土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩(5mm・3mm・1mm)による仕分け、磁着作業を行った。この工程を経て得られた遺物には、土器・石器の細片や鉄滓類・砂鉄などがある。

(8) 調査の経過

①平成19年度調査

調査期間は平成19年10月30日～12月5日で、作業実働日数は25日であった。作業員の登録人数は28人で、一日の平均稼働作業員数は26人ほどで作業を行った。以下に調査経過を簡略に記す。

10月30日(火) 調査開始、作業員登録28人

11月13日(火) 基準点測量(釜石測量設計株式会社)

11月27日(火) 航空写真撮影(東邦航空)

11月28日(水) 終了確認。

12月5日(水) 調査終了・撤収

具体的な調査の進行状況を記す。調査対象区域は、平成17年度に試掘調査が行われた14,370m²より本調査対象範囲として示された8,300m²の内、北側1,900m²を対象として第1次調査を行った。

調査区の現況は山林で、木は伐採されていたが、木を積み出す際に旧地形を造成して設けられた作業道が、調査区を縦断していた。作業は、調査区の確認を行った後、人力で雜物撤去を行った。集積した雜物は、後に重機で調査区域外に搬出した。その後、任意にトレンチを設けて試掘調査を行つた。

調査区は南側尾根部と北側谷部に分かれる。北側谷部は、重機により表土を掘削し、遺構検出、精査を行った。尾根部は試掘調査を行い、遺構が確認された部分について拡張して調査を行つた。

遺跡の公開は、11月から12月上旬の降雪・積雪時における調査であったために行わなかつた。

②平成20年度調査

調査期間は平成20年11月4日～11月27日で、作業実働日数は17日であった。作業員の登録人数は21人で、一日の平均稼働作業員数は19人ほどで作業を行つた。以下に調査経過を簡略に記す。

11月4日(火) 調査開始、作業員登録21人

2 室内整理

- 11月12日（水）基準点測量（釜石測量設計株式会社）
11月21日（金）航空写真撮影（東邦航空）
11月25日（火）終了確認。
11月27日（木）調査終了、撤収
具体的な調査の進行状況を記す。調査対象区域は、1次調査に引き続いで行われた第2次調査で、南側2,800m²を対象として行われた。

調査区の現況は山林で、木は伐採されていたが、木を積み出す際に旧地形を造成して設けられた作業道が調査区を縱断していた。作業は、調査区の確認を行った後、人力で雑物撤去を行った。集積した雑物は、後に重機で調査区域外に搬出した。その後、任意にトレンチを設けて試掘調査を行った。

調査区は西側尾根部と東側谷部に分かれる。半坦面が顯著でないことから、平成17年の試掘調査の結果を参考として試掘調査を行い、遺構が確認された個所について拡張して調査を行う方針で進めた。遺跡の公開は、11月の降雪・積雪時の調査であったために行わなかった。

③平成21年度調査

調査期間は平成21年5月25日～7月3日である。調査区は遺跡の中で最も標高の高い山頂部、そこから広がる斜面部、斜面を下りたところに広がる低位面からなる。樹木伐採後、重機による雑物除去、人力による表土除去、遺構検出、遺構精査・実測を行っている。

2 室 内 整 理

平成19年度調査の室内整理の期間は、平成20年2月1日～平成20年2月29日、延べ20日、整理に従事した作業員は1名である。平成20年度調査の室内整理の期間は、平成21年3月2日～平成21年3月31日、延べ21日である。整理作業は調査員が行った。平成21年度調査の整理期間は平成22年1月16日～平成22年3月31日である。それぞれ各年度の調査で得られた遺物・実測図・写真などについて整理を行った。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

（1）遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、第1原図を作成してトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、当センターの様式に基づき現場で入手した情報をそのまま保存することとし、打ち出したデータは、手実測で記録したその他の実測図と合わせて、マイラー用紙に第2原図を作成している。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一緒にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。デジタルカメラで撮影したものは当センターの様式に基づきRAWデータで収納した。

（2）遺 物 の 整 理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を登録した遺物Noを全破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物はグリッドごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・炭化種実・放射性炭素年代測定などの分析は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師1名が行った。

(3) 遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するための資料とした。

a 土器

はじめに出土地点別に重量計測を行った。土器の接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器については、原則としては計測値（器高・口径・底径）1箇所以上計測可能なもの（器形が把握できるもの）を立体土器として登録し、図化した。破片資料は、優先的に口縁部破片を選択したが、一部胴部破片も選んでいる。そして、該当する土器の時期や型式名など記録して数的処理を行った。

b 石器

石器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、造構内出土遺物を優先して図化することにし、それ以外の石器は、観察表・写真を掲載するに留めた。

c 陶磁器

陶磁器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、造構内出土遺物及び19世紀代の資料である。

d 金属製品

金属製品は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、全点の観察表・図・写真を掲載した。和鏡と飾金具については、外部に成分分析・保存処理を委託した。

e 自然遺物

炭化材がある。炭化材は、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行った。炭化材は、観察表のみの掲載とし、樹種名を掲載するに留めた。なお、外部の専門家による樹種同定を行った。

IV 平成19年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 検出遺構の概要

平成19年度調査で検出された遺構は、縄文時代の堅穴住居跡2棟、土坑10基、陥し穴状遺構9基、柱穴状土坑25個、落ち込み1箇所である。

遺構の占地は、縄文時代の堅穴住居跡や人形の土坑類は尾根上に占地し、その他の土坑と陥し穴状遺構は、尾根北側に広がる沢沿いの平坦部に占地している。遺構の種類によって占地が異なる。

(2) 堅穴住居跡

堅穴住居跡は尾根上から2棟確認された。検出された2棟は、いずれも円形基調で石圓炉を伴うなど形状が類似している。遺構の形状と出土遺物から縄文時代中期の住居跡と考えられる。各住居跡の特徴については、第2表を参照されたい。

S I 01堅穴住居跡

遺構（第6図、写真図版4）

【位置・検出状況】 II B10 c ~ III B1 c グリッド。旧試掘トレンチNo59の堅穴住居跡（古代）「北側の尾根部ではカマドを伴う堅穴住居跡1棟を確認した」とされていた部分を掘り下げて確認したところ、石圓炉が確認されたため、ベルトを設定して精査を進めた。その結果、IV層で黒色土の広がりと、壁・床などが確認できたことから、縄文時代の堅穴住居跡の存在を想定して調査を進めた。

【重複関係】 東側でSK14・19土坑と重複する。SK14土坑の覆土がS I 01堅穴住居跡の覆土を切っていたため、S I 01堅穴住居跡はSK14土坑に切られている。また、SK19土坑を掘り込んでPP13がつくられていたことから、S I 01堅穴住居跡がSK19土坑を切っている。これらの遺構の新旧関係は、SK19土坑→S I 01堅穴住居跡→SK14土坑である。

【規模・平面形】 東側は斜面下になるため壁・床が消失している。住居跡全体の西側半分の検出となつた。正確な規模・形状は不明である。残存している部分の規模は、(4.51) × 3.49mで、平面形は円形基調と推定される。

【覆土・堆積状況】 黒色土と褐色土で構成される。自然堆積と考えられる。

【壁・床面】 壁・床は、IV層を掘り込んでつくられている。残存している西壁は外傾して立ち上がる。壁高は最大61.5cmである。床はほぼ平坦だが、石圓炉より東側の床は残存していない。

【柱穴・配障】 PP1~13の13箇所を確認した。PP1・2・5・13は主柱穴になる可能性がある。

【炉】 石圓炉が1基確認されている。炉の位置は、住居跡全体のなかで東寄りに位置している可能性がある。炉の規模・平面形は、径70×66cmの方形基調の石圓炉で、周囲を一回り大きく掘り込んでから石組をしている。北側部分に炉石を構成する疊は確認できていない。使用されている石材は、花崗閃綠岩が主体で、凝灰岩（北上山地産・中生代三疊紀～ジュラ紀）も用いられている。石圓炉内には被熱痕がある。焼土の厚さは明瞭ではなく、石圓炉の一部のIV層がわずかに被熱している程度である。

【遺物】 (第16・17図、写真図版12・13)

【出土状況】 覆土から縄文土器片（28.9g）と石器が出土している。

[土器] 土器片（1・2）。

[石器] 石匙（23）。

時期 出土した遺物と遺構の形状から、縄文時代中期と考えられる。

S I 02竪穴住居跡

遺構（第7図、写真図版5）

[位置・検出状況] III B1 b グリッド。S I 01竪穴住居跡の西側を試掘調査中に縄文土器が出土し、精査を続けたところ石圓炉を確認し、住居跡の存在を想定して調査を進めた。検出面はIV層である。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 東側が斜面下になるため壁・床は消失している。住居跡の北東側約半分程度を検出した状態である。そのため正確な規模・形状は不明だが、残存している部分は（3.54）×（3.14）m、平面形は円形基調と推測される。

[覆土・堆積状況] 褐色土・明黄褐色土・黃褐色土で構成される。自然堆積と考えられる。

[壁・床面] 壁・床は、IV層を掘り込んでつくられている。残存している西壁は外傾して立ち上がる。壁高は最大44.7cmである。床はほぼ平坦だが、石圓炉より東側と南側の壁・床は残存していない。

[柱穴・配置] P P 1～7の7個を確認した。炉跡を挟んで対称的な位置にあるP P 1・7・3・5は、主柱穴である可能性がある。

[炉] 石圓炉が1基確認されている。炉の位置は、住居跡の形状のなかで北寄りに位置する。炉の規模・平面形は、径67×60cmの方形基調で、石材は花崗閃緑岩や砂岩（北上山地産・中生代三疊紀～ジュラ紀）が用いられている。焼土の厚さは明瞭ではなく、石組内的一部でIV層がわずかに被熱している程度である。

遺物（第16・17図、写真図版12・13）

[出土状況] 覆土から土器片（234.1g）と石器が出土している。

[土器] 土器片（3・4）。

[石器] 両極石器（26）。

時期 出土した遺物と遺構の形状から、縄文時代中期と考えられる。

(3) 土 坑

用途不明のものを含む穴を一括した。10基ある。このなかには、尾根上で確認された定形的な規模・形状をもつ、貯蔵穴としての用途が想定されるSK14・19土坑の2基を含めている。時期は、概ね縄文時代と考えられるが、出土遺物を欠く土坑の詳細な時期は不明である。SK09・10土坑の覆土には調査時に中揮火山灰と認識した火山灰が含まれていた。また、SK01～03土坑は、調査時に中揮火山灰と認識した火山灰を覆土に含むSX01落ち込みを掘り込んでつくられていた。各土坑の特徴については第3表を参照されたい。

SK01土坑

遺構（第8図、写真図版6）

[位置・検出状況] II A 3 j～II B 3 a グリッド。SX01落ち込みの覆土中で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] SX01落ち込みを切っている。

1 檜山遺構

【規模・平面形】 規模は、開口部径93×82cm、底部径31×24cm、平面形は橢円形を呈する。深さは106cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土・褐色土・暗褐色土で構成される。

【壁・底面】 壁・底面はS X01落ち込みの覆土を掘り込んでつくられている。底面は南から北に下がっている。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K02土坑

遺構（第8図、写真図版6）

【位置・検出状況】 II B 3 a グリッド。S X01落ち込み覆土中で黒褐色土の広がりとして検出された。

【重複関係】 S X01落ち込みを切っている。

【規模・平面形】 規模は、開口部径135×69cm、底部径77×47cm、平面形は橢円形を呈する。深さは45cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土・暗褐色土で構成される。

【壁・底面】 壁・底面はS X01落ち込みの覆土を掘り込んでつくられている。底面は中央部が落ち込む形状である。覆土の状況から、二つの穴が重複していた可能性もある。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K03土坑

遺構（第8図、写真図版6）

【位置・検出状況】 II B 3 a グリッド。S X01落ち込み覆土中で黒褐色土の広がりとして検出された。

【重複関係】 S X01落ち込みを切っている。

【規模・平面形】 規模は、開口部径92×58cm、底部径76×36cm、平面形は橢円形を呈する。深さは45cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土で構成される。

【壁・底面】 壁・底面はS X01覆土を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面は緩く湾曲する。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K04土坑

遺構（第8図、写真図版6）

【位置・検出状況】 II B 1 e～2 e グリッド。北側は沢への落ち込みに堆積する黒色土上で、南側はⅢ層上で黒色土の広がりとして検出された。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 規模は、開口部径124×103cm、底部径94×76cm、平面形は円形を呈する。深さは26

cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土で構成される。

【壁・底面】 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K 09土坑

遺構（第8図、写真図版7）

【位置・検出状況】 II A 6 j グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 規模は、開口部径101×58cm、底部径83×40cm、平面形は橢円形を呈する。深さは34cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土で構成される。1層に火山灰が含まれている。調査時には中揮火山灰と認識したものであるが、分析の結果、十和田a火山灰である可能性が指摘されている（56頁）。

【壁・底面】 壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は南から北に緩く傾斜する。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。覆土中の火山灰が、時期を類推する手懸かりとなる。

S K 10土坑

遺構（第8図、写真図版7）

【位置・検出状況】 II A 5 j グリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 規模は、開口部径125×89cm、底部径84×37cm、平面形は橢円形を呈する。深さは56cmである。

【覆土・堆積状況】 暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土で構成される。上層に火山灰が含まれている。調査時には中揮火山灰と認識したものである。

【壁・底面】 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。覆土中の火山灰が、時期を類推する手懸かりとなる。

S K 12土坑

遺構（第8図、写真図版7）

【位置・検出状況】 I B 9 e グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 規模は、開口部径123×54cm、底部径86×25cm、平面形は橢円形を呈する。深さは54cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土で構成される。

1 検出遺構

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

S K 14土坑

遺構 (第9図、写真図版7・8)

[位置・検出状況] ⅡB10 b・ⅢB1 c グリッド。IV層で褐色土の広がりとして検出した。S I 01堅穴住居跡の西側の壁を精査していたところ、堅穴住居跡に重複する土坑として確認した。

[重複関係] S I 01堅穴住居跡・S K 19土坑と重複する。S K 14土坑の覆土がS I 01堅穴住居跡の覆土を切っていたことから、S K 14土坑が新しい。また、平面形状からS K 14土坑がS K 19土坑を切っている。これらの遺構の新旧関係は、S K 19土坑 → S I 01堅穴住居跡 → S K 14土坑である。

[規模・平面形] 規模は、開口部径182×156cm、底部径153×128cm、平面形は円形基調である。深さは207cmである。

[覆土・堆積状況] 褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はIV層を掘り込んでつくられている。壁は内湾しながら立ち上がる。断面形はフラスコ状である。底面は、ほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 遺構の重複関係から縄文時代中期と考えられる。

S K 18土坑

遺構 (第8図、写真図版8)

[位置・検出状況] ⅡB4 e グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径107×97cm、底部径72×57cm、平面形は橢円形である。深さは92cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁はほぼ直ぐに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第16図、写真図版12)

[出土状況] 覆土下位から縄文土器片 (44.1g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (5)

時期 出土遺物から縄文時代と推測される。

S K 19土坑

遺構 (第9図、写真図版8)

[位置・検出状況] ⅡB10 c グリッド。S I 01堅穴住居跡の精査中に床面 (IV層) で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] S I 01竪穴住居跡・S K14土坑と重複する。S K14土坑の平面形がS K19土坑の平面形を切っていたことから、S K19土坑はS K14土坑に切られている。また、S I 01竪穴住居跡-P P 13がS K19土坑の覆土を掘り込んでつくられていたことから、S K19土坑はS I 01竪穴住居跡に切られている。これらの遺構の新旧関係は、S K19土坑 → S I 01竪穴住居跡 → S K14土坑である。

[規模・平面形] 規模は、開口部径(121)×104cm、底部径103×84cm、平面形は円形基調である。深さは128cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・明黄褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁は内湾しながら立ち上がる。断面形は楔が広がるフラスコ状を呈する。底面は、ほぼ平坦である。S K19土坑とK14土坑の重複する底部には、礫が置かれていた。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第16図、写真図版12)

[出土状況] 覆土から繩文土器片(248.8g)が出土している。

[土器] 繩文土器(6~9)。

時期 出土遺物と遺構の重複関係から縄文時代中期と推測される。出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、4160±30yrBPの結果が得られている(56頁)。

(4) 陥し穴状遺構

形状から、陥し穴としての機能が考えられる穴である。調査区北側の平坦面から9基確認された。平面形は、楕円形、溝状などの形状を呈するものがある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、縄文時代と推測される。各陥し穴状遺構の特徴については、第4表を参照されたい。

S K05陥し穴状遺構

遺構 (第10図、写真図版9)

[位置・検出状況] I I 10 b・10 c グリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。遺構ではないが、北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径170×86cm、底部径108×20cm、平面形は長軸の長い楕円形を呈する。南側の張り出しが掘りすぎたものである。深さは68cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・黒褐色土から構成される。暗褐色土層には小礫を10%含んでいる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁はほぼ直立に立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南東側が一段高くなっている。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K06陥し穴状遺構

遺構 (第10図、写真図版9)

[位置・検出状況] II B 6 h グリッド。Ⅲ層で細長い黒褐色土の広がりとして検出した。平面形状の検出面はⅢ層だが、断面を観察するとⅡ層中から掘り込まれている。東側が調査区外にかかる。

[重複関係] なし。

1 検出遺構

[規模・平面形] 規模は、開口部径(73)×35cm、底部径(65)×18cm、平面形は細長い溝状を呈するものと推定される。深さは45cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 07陥し穴状遺構

遺構 (第11図、写真図版9)

[位置・検出状況] II B 6 g グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径168×74cm、底部径91×42cm、平面形は細長い椭円形を呈する。深さは63cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・褐色土・暗褐色土から構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がる。底面は西から東へ傾斜している。

[その他の付属施設] 底面の中央より東寄りに副穴を1個確認した。開口部が径20cmほどある開口部の広い穴である。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 08陥し穴状遺構

遺構 (第11図、写真図版9)

[位置・検出状況] I B 10 f・II B 1 f グリッド。北側は沢に向かって落ち込む黒色の堆積土上、南側はⅢ層上にまたがって、黒褐色土の細長い広がりとして検出した。

[重複関係] なし。遺構ではないが、調査区北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径331×74cm、底部径312×17cm、平面形は溝状を呈する。深さは89cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・黒褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がる。底面は、南側から北側にかけて緩く傾斜する。

[その他の付属施設] なし。

遺物 覆土から土器(7.3g)が出土している。小片のため不掲載である。

時期 出土遺物は少量であり、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 11陥し穴状遺構

遺構 (第12図、写真図版10)

[位置・検出状況] II B 3 b～3 c グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径439×67cm、底部径234×13cm、平面形は溝状を呈する。深さは101cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・褐色土・黄褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は中央付近が落ち込むように緩く湾曲している。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。なお、出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、 5060 ± 40 yrBPの結果が得られている（53頁）。

S K 13陥し穴状造構

造構（第12図、写真図版10）

[位置・検出状況] II B 5 d ~ 5 e グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は、開口部径399×63cm、底部径377×19cm、平面形は溝状を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは114cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は直線的で長軸方向の西から東にかけて緩く傾斜する。

[その他の付属施設] 底面に副穴4個を伴う。径20cm、深さ15~25cm程度の穴である。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 15陥し穴状造構

造構（第13図、写真図版10・11）

[位置・検出状況] II B 3 c ~ 3 d グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。造構ではないが、北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切っている。

[規模・平面形] 規模は、開口部径235×58cm、底部径208×14cm、平面形は溝状を呈する。深さは79cmである。

[覆土・堆積状況] 黑褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] 底面に副穴を2個伴う。規模は径20cm、深さ15cmほどの穴である。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K 16陥し穴状造構

造構（第13図、写真図版11）

[位置・検出状況] II B 2 c ~ 2 d グリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。造構ではないが、北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切って掘り込まれている。

1 検出遺構

【規模・平面形】 規模は、開口部径230×54cm、底部径197×28cm、平面形は溝状を呈する。深さは59cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土で構成される。自然堆積と思われる。

【壁・底面】 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は緩く湾曲する。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

S K17陥し穴状遺構

遺構（第13図、写真図版11）

【位置・検出状況】 II B 2 c グリッド。北側の沢に向かう落ち込みの堆積土を切って掘り込まれている。Ⅲ層相当で黒褐色土の広がりとして検出した。南側に落ち込みに対する試掘溝を入れており、そのため遺構の南東部を失っている。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 規模は、開口部径267×42cm、底部径218×20cm、平面形は溝状を呈する。深さは39cmである。

【覆土・堆積状況】 黒褐色土・暗褐色土で構成される。

【壁・底面】 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は長軸方向の西から東へ緩く傾斜する。

【その他の付属施設】 なし。

遺物 土器片（28.0 g）が覆土中から出土しているが、小片のため不掲載である。

時期 出土した遺物は少量であり、詳細は不明だが、縄文時代と考えられる。

(5) 落ち込み

調査区北側の平坦面で、調査区域外の西側から延びる形で落ち込みが確認された。人為的な遺構とは判断していないが、黒褐色土の覆土中に火山灰を確認できたこと、落ち込みを切る遺構が確認できしたこと、落ち込みに切られる遺構が想定されたこと、などから精査を行ったものである。

S X01落ち込み

遺構（第14図、写真図版11）

【位置・検出状況】 II A 1 i ~ II B 4 a グリッド。Ⅲ層で中揮火山灰を含む暗褐色土の広がりとして確認した。

【重複関係】 S K01・02・03:土坑に切られている。

【規模・平面形】 検出された範囲は、南北約15m、東西約7mで、壁の上面観は曲線的である。深さはもっとも深いところで1.5mほどである。

【覆土・堆積状況】 にぶい黄褐色土・黒褐色土・褐色土・暗褐色土で構成される。にぶい黄褐色土は上下に細分される。調査時に中揮火山灰と認識した火山灰である。

【壁・底面】 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がる。底面は、やや凹凸があるが、ほぼ平坦である。調査時に湧水が確認できている。

【その他の付属施設】 なし。

遺物（第16図、写真図版12）

[出土状況] 黒色土層中から土器片（77.7 g）が出土している。

[土器] 縄文土器（14）。

時期 覆土の状態と遺物出土状況から縄文時代以降に埋没したものと推測されるが、詳細は不明である。なお、S X01落ち込みの覆土で確認された火山灰は、調査時には S K09土坑の覆土で確認された火山灰と同一のものと認識したものである。S K09土坑覆土中の火山灰の同定結果に拠れば、所属時期が大きく異なる可能性はある。性格は埋没沢の可能性がある。

（6）柱穴状土坑

調査区北側の平坦面で、柱穴状土坑が25個確認された。分布から、Ⅱ B 3 a グリッド付近で検出された6個と、Ⅱ B 1 f ~ 3 f グリッド付近で検出された19個に大別される。建物の構成を確認できていないので、柱穴群として報告する。個々の柱穴状土坑の規模は、観察表を参照されたい。

P P 1 ~ 6 柱穴状土坑

遺構（第15図、写真図版3）

[位置・検出状況] P P 1 はⅢ層、P P 2 ~ 6 は S X01落ち込みの覆土中で検出された。

[重複関係] P P 2 ~ 6 は S X01落ち込みを切っている。

[規模・平面形] 個々の柱穴の規模には差がある。柱穴群は径4 m四方に分布する。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土が主体である。

[壁・底面] 壁・底面は検出面と同様にⅢ層である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 P P 2 から土器（19.8 g）が出土した。小片のため不掲載である。

時期 覆土の状態と遺物出土状況から縄文時代以降と推測される。

P P 7 ~ 25 柱穴状土坑

遺構（第15図、写真図版3）

[位置・検出状況] Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] P P 21・20は北側の沢に落ち込む堆積土を切ってつくられている。

[規模・平面形] 個々の柱穴の規模には差がある。柱穴群は径6 × 12m四方に分布する。P P 7・8・9・10・11が北東 - 南西方向で直線的に並ぶ。柱間の距離は約1.8 ~ 2 m（約6尺）である。

検出された柱穴は、深さも10 ~ 27cmと浅いことから、周辺は削平されているものと推測される。すでに消滅した柱穴の存在を想定すれば、P P 7 ~ 10にP P 20・21を含めた建物跡の存在も想定されるのかもしれない。柱列は、建物跡を構成していた可能性もある。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土が主体である。

[壁・底面] 壁・底面は検出面と同様にⅢ層である。

[その他の付属施設] なし。

遺物（第17図、写真図版13）

[出土状況] P P 7 から銭貨が出土している。

[銭貨] 元祐通宝（俗称：叶手元祐、初鑄年：近世前期）(42)。

時期 近世前期の銭貨が出土していることから、これらの柱穴は近世以降の可能性がある。

1 検出遺構

第2表 穴穴住居跡観察表

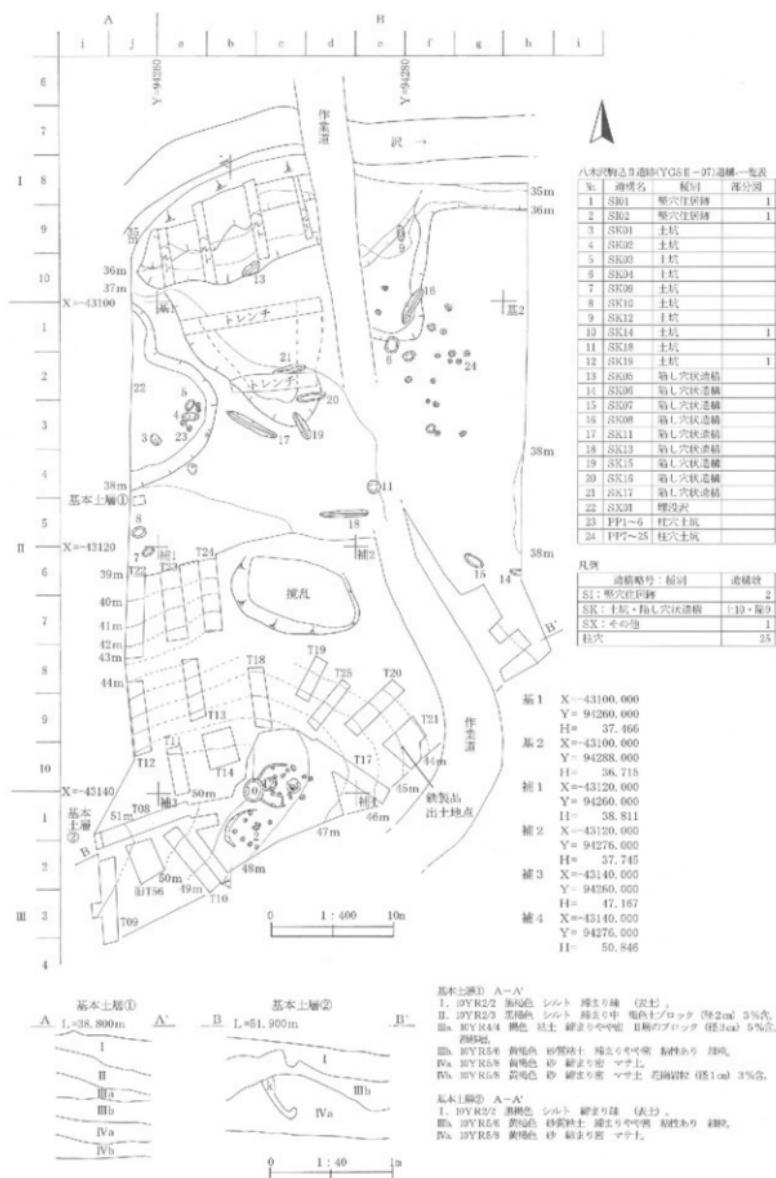
												(数値) : 截存量					
図版 No.	場所 No.	遺物名	区分	検出部	平面形	規模(m)	壁厚(cm)	軒高(cm)	勾配の傾き(cm)	窓の位置(cm)	柱穴・柱P管	覆土の堆積状況(cm)	柱穴下限(cm)	廃棄	重複関係(旧一新)	消去 (削除No.)	呼称
6	4	SK01 ■B10c, ■B1c	IV	IV	椭円形?	(1.51)×3.49	61.5	右端部	70×66	IV層の 被覆のみ	13	黒褐色土、褐色土	なし	SK19→SK10 →SK14	1・2・23 →SK14	鶴文 山型	
7	5	SK02 ■B11b	IV	IV	円形?	(3.84)×(3.14)	46.7	右端部	67×60	IV層の 被覆のみ	7	褐色土、褐黃褐色土、 黄褐色土	なし		3・4・26 →SK14	鶴文 山型	

第3表 土坑観察表

												(数値) : 截存量		
深さ No.	場所 No.	遺物名	位置	地表面	平面形	規模(cm)			底面の レベル (m)	覆土の堆積状況	重複関係	性格	付帯施設	時期
8	6	SK01 ■A3), ■B3a	II?	円形	83×82	31×24	106.8	36.705	黒褐色土、褐色土、褐色土	SK01→SK01	上	なし	不明	
8	6	SK02 ■B3a	II?	椭円形	135×69	77×47	95.0	37.269	黒褐色土、褐色土	SK01→SK02	土	なし	不明	
8	6	SK03 ■B3a	II?	円内形	92×58	76×36	95.3	37.253	黒褐色土	SK01→SK03	土	なし	不明	
8	6	SK04 ■B1e, ■e	III	円形	124×103	94×76	86.4	56.560	黒褐色土		なし	土	なし	不明
8	7	SK09 ■A3c	III	椭円形	101×58	85×40	34.6	58.547	黒褐色土 (大山灰含む)		土	なし	不明	
8	7	SK10 ■A3d	III	椭円形	135×89	84×37	66.7	38.109	黒褐色土、黒褐色土 (大山灰含む)		なし	土	なし	不明
8	7	SK12 I B9e	III	椭円形	123×54	86×55	54.3	55.499	黒褐色土		なし	土	なし	不明
9	7・8	SK14 ■B10b, ■B1c	IV	円形	183×156	133×128	207.0	47.052	褐色土、暗褐色土、黃褐色土	SK19→SK01 →SK14	中	なし	鶴文 山型	
8	8	SK18 ■B4e	III	円形	107×97	72×57	92.4	38.177	黒褐色土、褐色土		なし	土	なし	不明
9	8	SK19 ■B10c	IV	円形	(121)×104	105×84	128.4	47.059	暗褐色土、褐黃褐色土、褐色土	SK19→SK01 →SK14	中	なし	鶴文 山型	

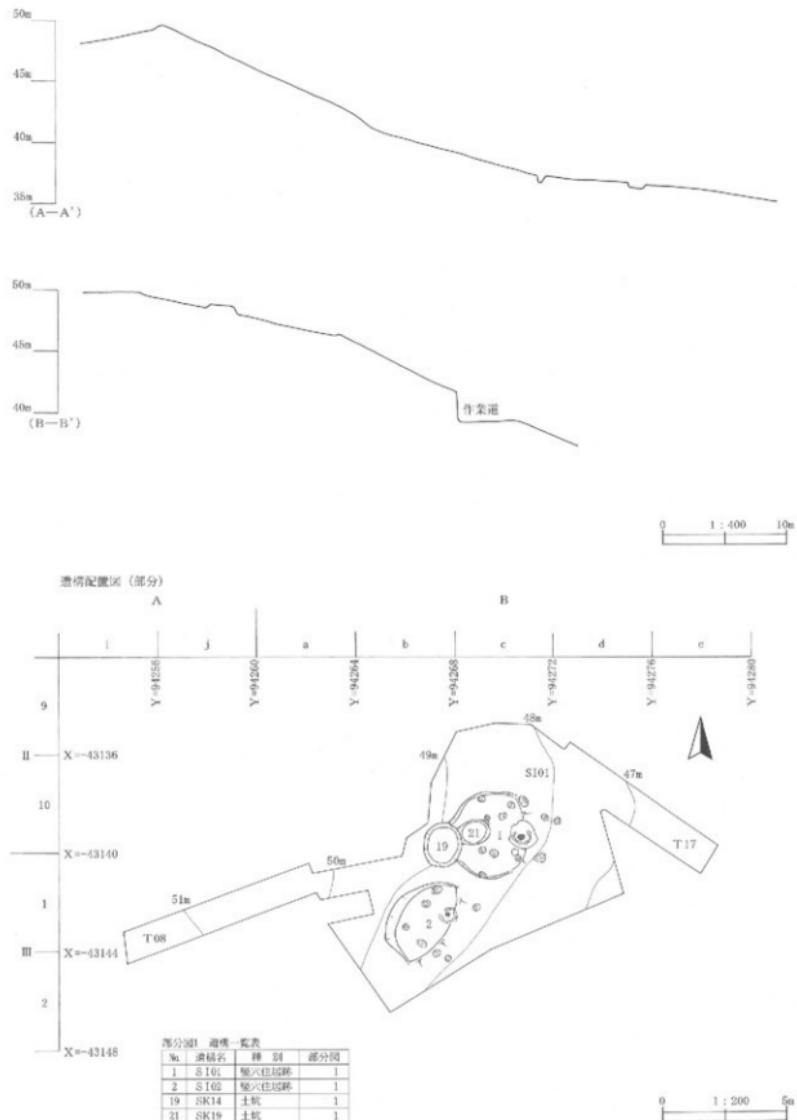
第4表 陥し穴状造構観察表

												(数値) : 截存量		
図版 No.	場所 No.	遺物名	位置	検出部	平面形	規模(m)			底面の レベル (m)	覆土の堆積状況	重複関係	性格	付帯施設	時期
10	9	SK05 ■B10b, ■B1c	III	椭円形	170×86	108×30	68.1	36.030	黒褐色土、黒褐色土		なし	階	なし	鶴文?
10	9	SK06 ■B10b	III	椭状?	720×35	65×18	45.0	35.616	黒褐色土、褐色土、暗褐色土		なし	階	なし	鶴文?
11	9	SK07 ■B6g	II	椭状	168×74	91×42	63.3	33.754	黒褐色土、褐色土、暗褐色土		なし	階	前穴? 墓	鶴文?
11	9	SK08 ■B10c, ■B11	II	椭円形	331×74	312×17	89.1	35.904	黒褐色土、暗褐色土、褐色土		なし	階	なし	鶴文?
12	10	SK11 ■B3h, ■c	III	椭状	458×67	234×13	101.1	36.606	黒褐色土、褐色土、暗褐色土		なし	階	なし	鶴文?
12	10	SK13 ■B5d, ■e	III	椭状	399×63	377×19	114.0	36.363	黒褐色土、暗褐色土、褐色土		なし	階	前穴4個	鶴文?
13	10・11	SK15 ■B3c, ■d	III	椭状	235×58	208×14	79.8	36.495	黒褐色土、褐色土、暗褐色土		なし	階	前穴4個	鶴文?
13	11	SK16 ■B2c, ■d	III	椭状	239×51	197×28	59.7	36.504	黒褐色土		なし	階	なし	鶴文?
13	11	SK17 ■B2c	III	椭状	267×45	248×30	39.3	36.450	黒褐色土(火山灰含む)、暗褐色土		なし	階	なし	鶴文?

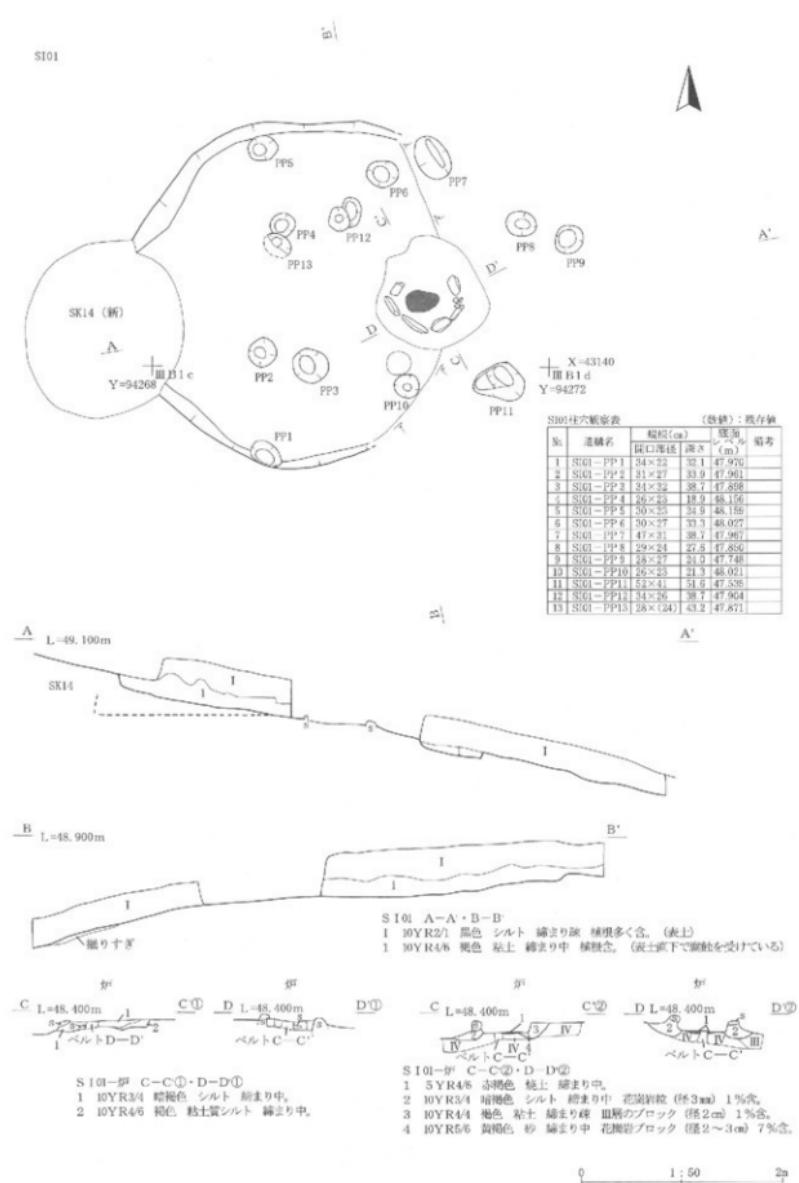


第4図 構造配置図(全体図)

1 檜出遺構

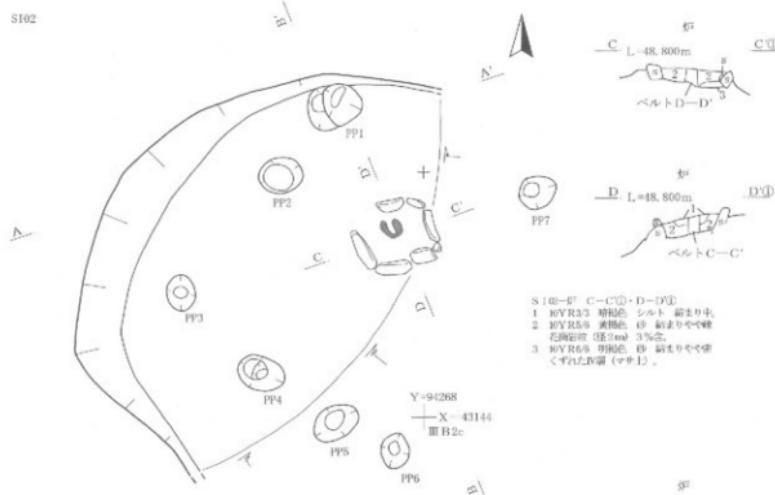


第5図 遺構配置図（部分図）



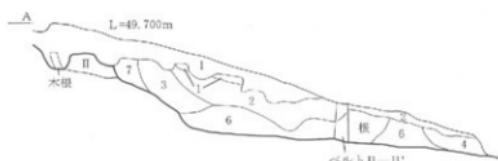
第6図 SI01付穴住居跡

SI02

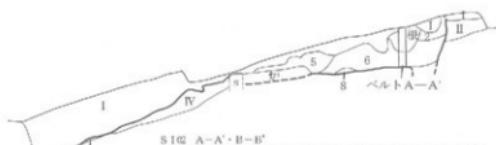


SI02柱六数表

No.	遺積名	(後壁) : 残存部	
		幅(10倍)	厚さ(10倍)
1	SI02-PP1	45×32	44.1 48.25
2	SI02-PP2	45×32	44.1 48.25
3	SI02-PP3	39×34	30.0 48.87
4	SI02-PP4	47×36	39.0 48.95
5	SI02-PP5	36×34	36.3 47.91
6	SI02-PP6	29×31	36.5 47.69
7	SI02-PP7	32×35	34.8 47.91



B L=49.400m



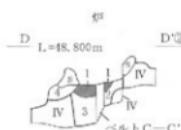
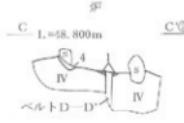
SI02 A-A'・B-B'

- HOYR4/4 頭部 砂質粘土 壊れ目隕 清水土坡 (厚5~7mm) 1%合。
- HOYR4/5 黄褐色 粘土 壊れ目隕 花崗岩塊 (厚1~2mm) 1%合。
- HOYR5/6 黄褐色 粘土 壊れ目隕 花崗岩ブロック (厚3~4cm) 1%合。
- HOYR4/4 頭部 砂質粘土 壊れ目隕 清水土坡 (厚2mm) 1%合。
- HOYR4/4 頭部 砂質粘土 壊れ目隕 清水土坡 (厚2mm) 1%合。
- HOYR5/6 黄褐色 粘土 壊れ目隕 花崗岩塊 (厚5mm) 1%・黄褐色土坡 (厚7mm) 3%合。
- HOYR5/6 黄褐色 粘土 壊れ目隕 花崗岩塊 (厚2mm) 3%合。
- HOYR6/6 黄褐色 粘土 壊れ目隕 黃褐色土坡 (厚5mm) 1%合。

S 102-I' C-C'・D-D'

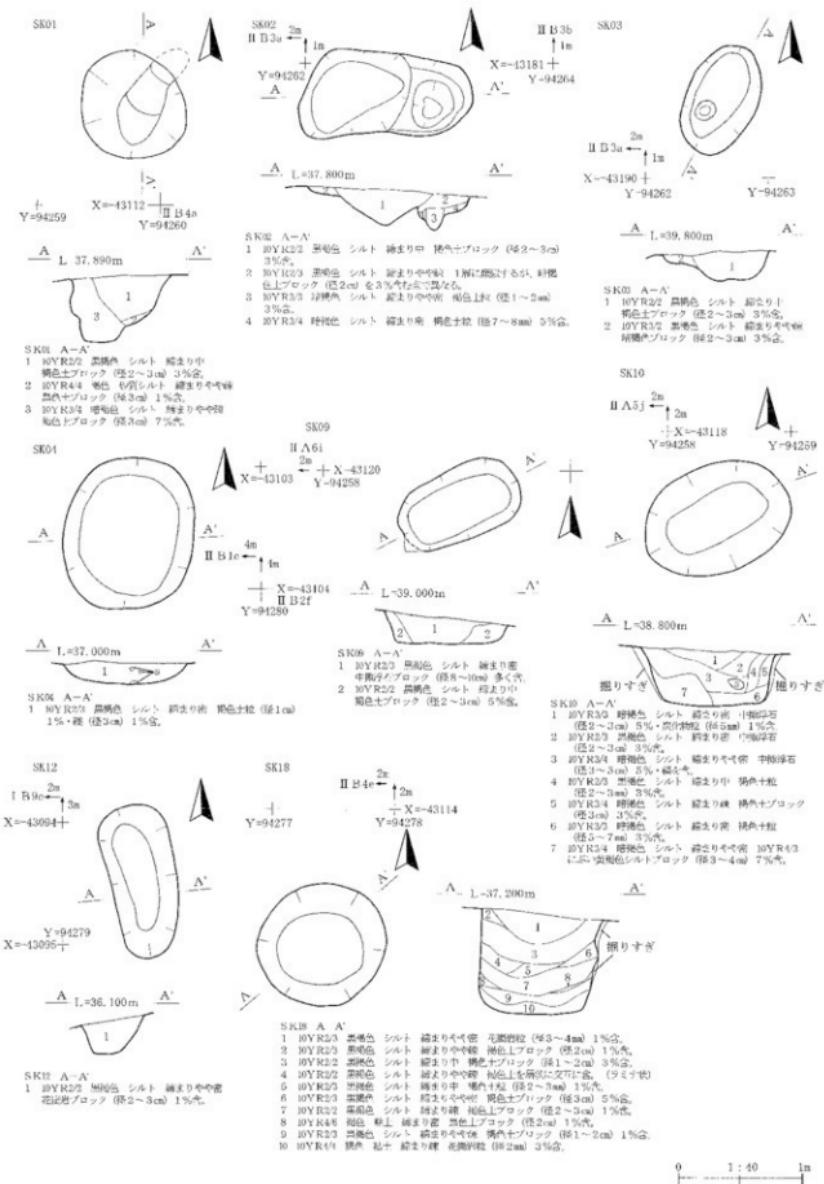
- 5YR4/6 黄褐色 泥土 壊れ目中。
- EYR2/4 黄褐色 泥土 壊れ目中。
- 5YR4/4 黄褐色 シルト 壊れ目中。
- EYR3/4 黄褐色 シルト 壊れ目中。

B'



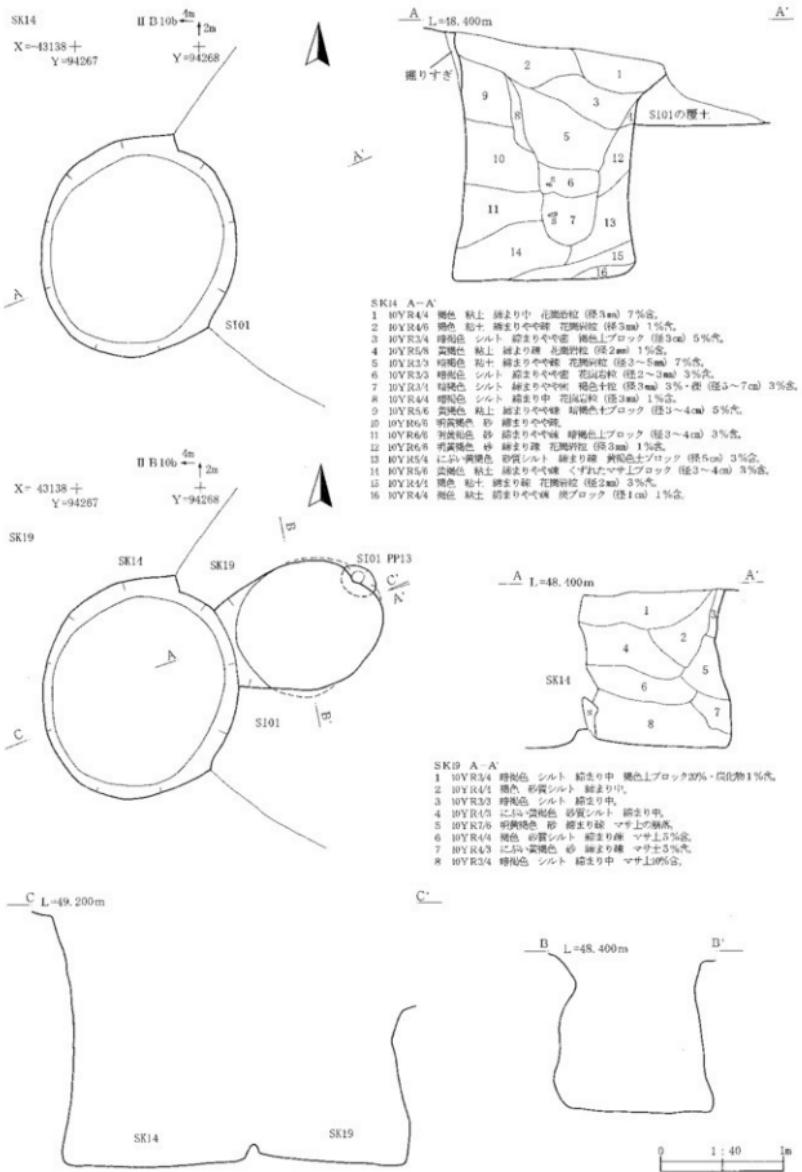
0 1:40 1m

第7図 SI02堅穴住居跡



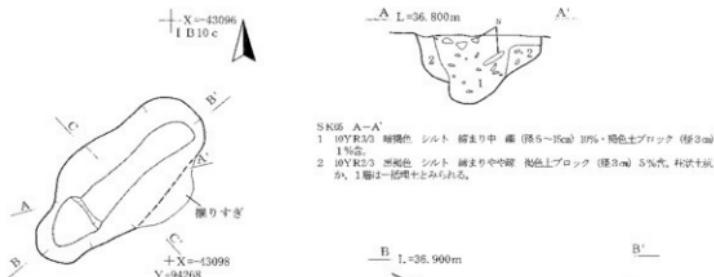
第8図 SK01～04・09・10・12・18土壤

1 検出地図

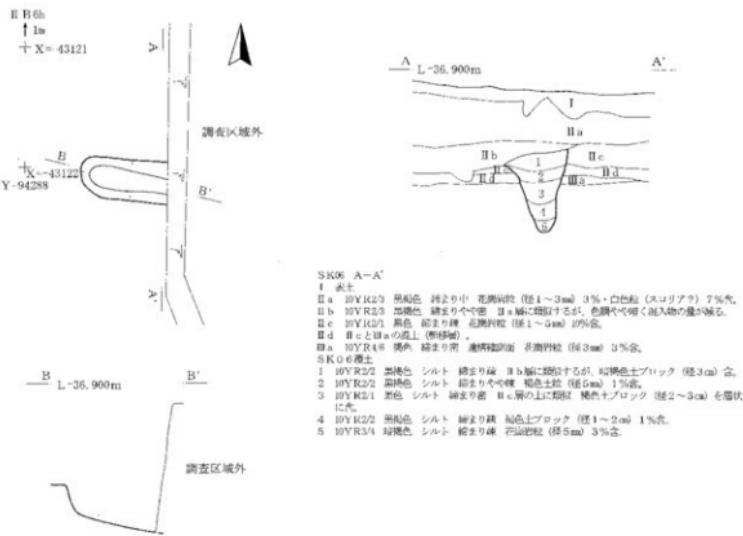


第9図 SK14・19土壤

SK05

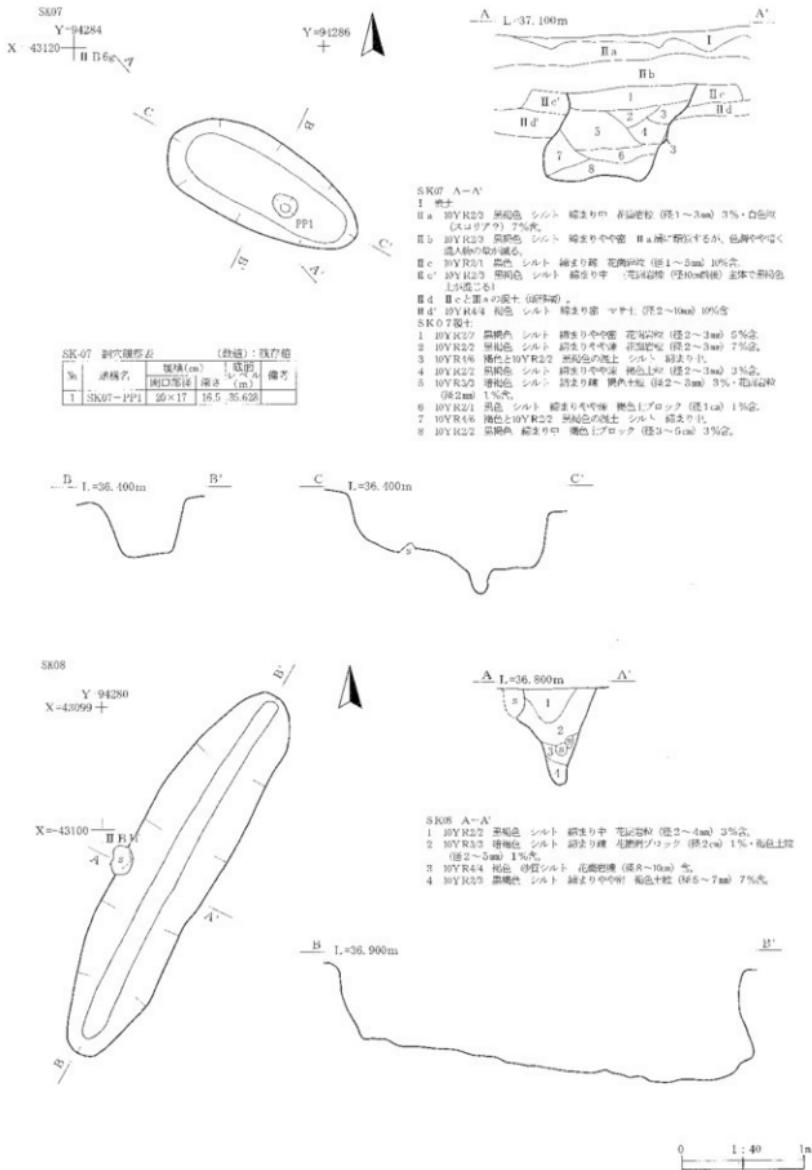


SK06

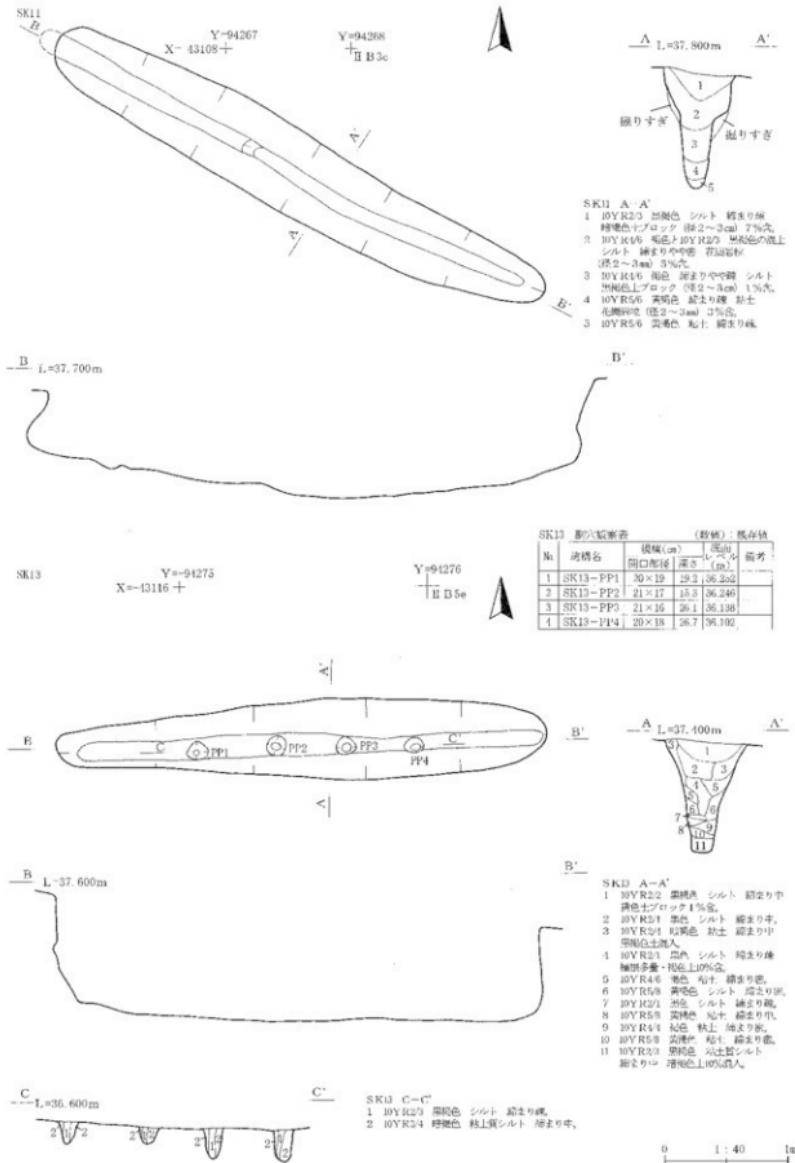


第10図 SK05・06陥し穴状造構

1 検出遺構

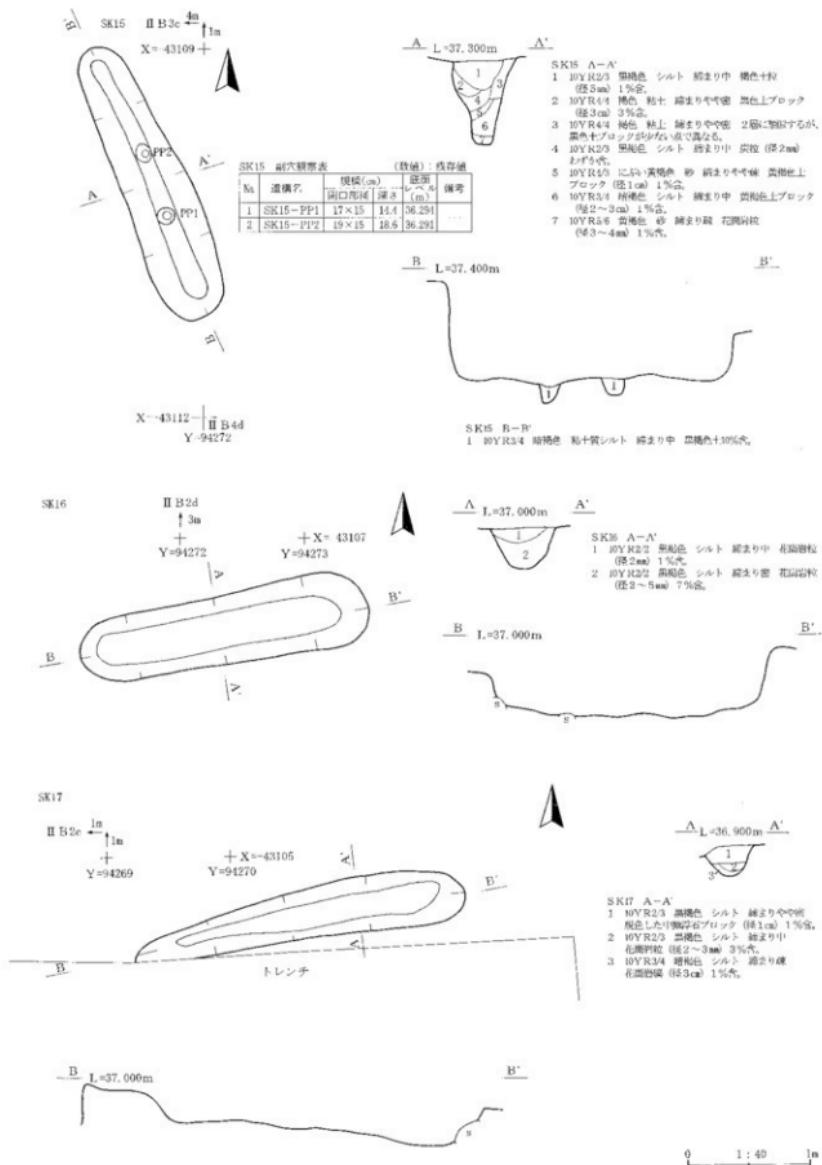


第11図 SK07・08陥し穴状造構

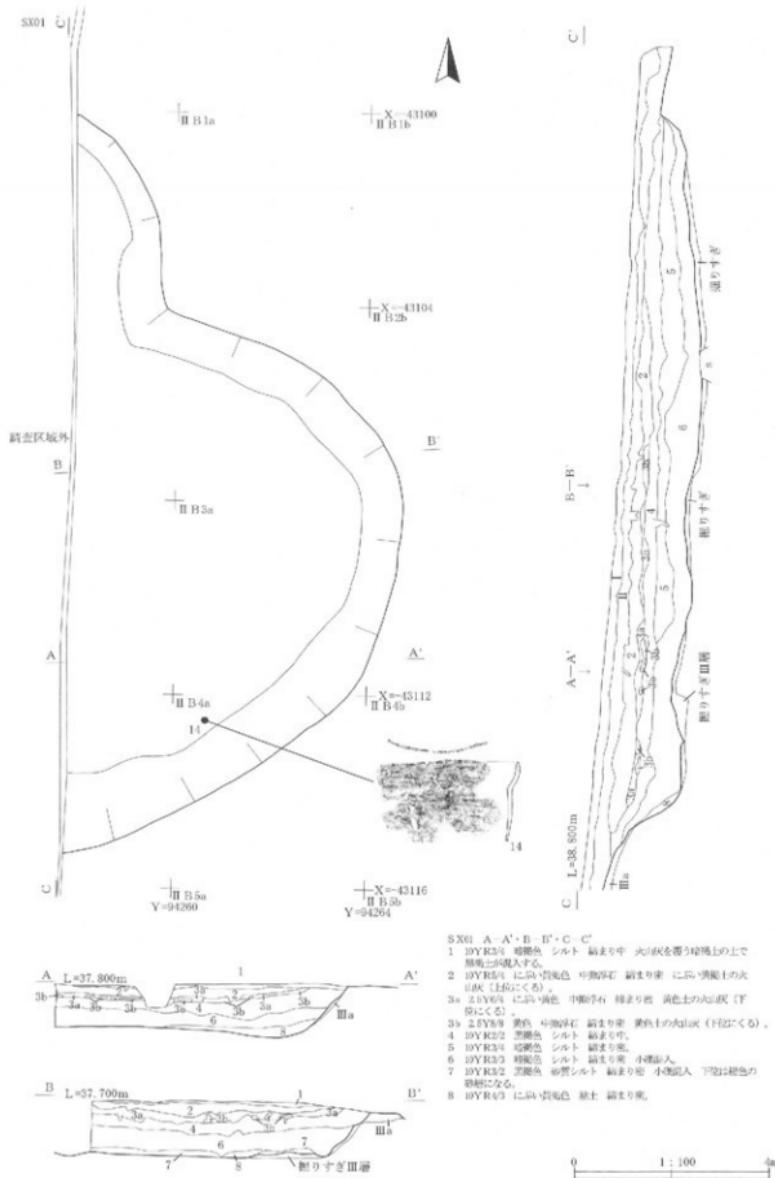


第12図 SK11・13箇所穴状遺構

1 検出遺構

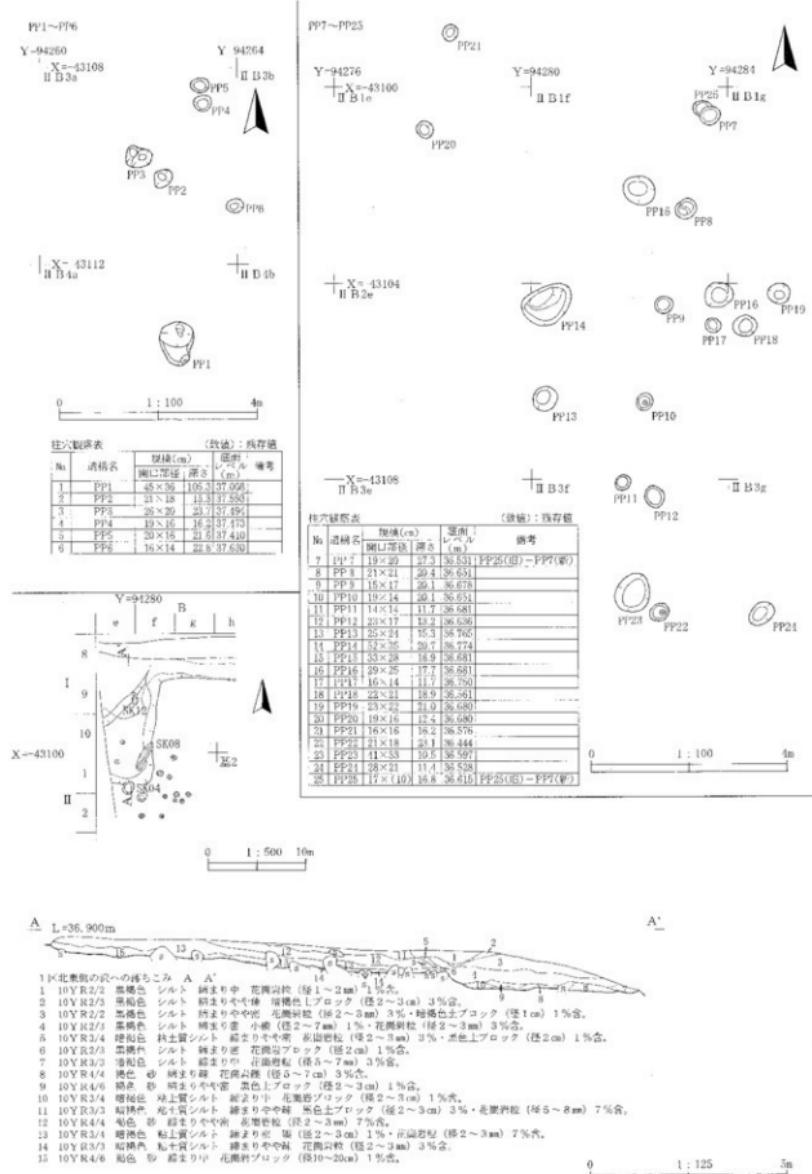


第13図 SK15~17陥し穴状遺構



第14図 SX01落ち込み

1 検出遺構



第15図 柱穴状土坑

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

平成19年度調査で出土した遺物は、縄文土器・石器・陶磁器・金属製品・錢貨・鉄滓類・炭化材である。出土量は大コンテナ1箱で、いずれも量は少ない。

(2) 縄文土器

土器は、小コンテナ1箱、総重量2905.7g出土している（第16図、写真図版12）。このうち16点を掲載した。出土地点をみると、尾根上のS I 01・02堅穴住居跡・S K19土坑・北側谷部にあたる平坦面から出土している。時期をみると、尾根上の堅穴住居跡出土の1～3、土坑出土の6～9は、縄文時代中期後葉から末葉の時期と判断される。北側谷部では、縄文時代早期から前期の土器と中期の土器が出土している。南側にある尾根上からの流れ込みの可能性もあるが、より上流の西側の尾根部や谷部から下流に流れてきた可能性もある。

(3) 石器

7点、総重量381.4gが出土している（第17図、写真図版13）。内訳は、石鏃2点、石匙2点、削器1点、両極石器1点、磨製石斧1点である。全点掲載し、図化した。出土状況をみると、S I 01堅穴住居跡から石匙1点、S I 02堅穴住居跡から両極石器1点が出土している。その他は1区北側の平坦面からの出土である。石材をみると、剥片石器類は、北上山地産の頁岩（中生代三疊紀～ジュラ紀）。磨製石斧は北上山地産（中生代白亜紀）の閃綠岩である。

なお、掲載した遺物のほかに剥片8点、総重量69.5gが出土している。すべて北上山地産の頁岩（中生代三疊紀～ジュラ紀）である。S I 02堅穴住居跡の炉の覆土から2点、他の6点は1区の平坦面から出土している。

(4) 陶磁器

陶磁器は3点、総重量18.0gが出土している（第17図、写真図版13）。いずれも破片である。全点掲載した。1区平坦面の北東側落ち込みから出土しており、平坦面から流れ込んだものと思われる。31は、陶器の小碗で19世紀頃、32は磁器の皿で18～19世紀ごろの肥前窓の染付である。

(5) 金属製品

1点出土している（第17図、写真図版13）。No41は板状の製品で、尖る一端が折れ曲がっている。

(6) 錢貨

1点出土している（第17図、写真図版13）。No42は元祐通寶（俗称：叶手元祐）と推測される。

(7) 鉄滓類

1点（19.7g）出土している（写真図版13）。磁着するもので銀治滓と推測される。

(8) 炭化材

炭化材は8点で総量4.1gが出土した。いずれも遺構の覆土中から出土したもので微量である。肉眼による樹種鑑定では、ナラ（S I 01堅穴住居跡）・クリ（S K11陥し穴状遺構・S K19土坑・S X01落ち込み）との鑑定結果を得ている。なお、出土した炭化材のうちS K11陥し穴状遺構出土（試料No.802）、S K19土坑出土（試料No.803）の2点の放射性炭素年代測定を行った（53頁）。

第8表 石器観察表

回数 No.	場所 No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	備考	(数値):既存等		
					長さ	幅	厚さ			石材名	产地等	
17	13	31	1区 池 薩摩鍋ち込み	黒色土壌中	石器	(1.4)	(1.1)	(1.2)	基盤欠損	A	1	
17	13	32	1区 池の内付近	古土壤	石器	(2.1)	1.8	0.4	0.5	河原風景	A	1
17	13	33	1区 池の内付近	南西側土	1/4下位	石器	4.8	0.9	17.4	破片、刀形:片山一削(細目)	A	1
17	13	34	北西側斜面	ト地点	石器	8.7	3.2	1.6	20.6	破片、刀形:内面(手彫り付)	A	1
17	13	35	1区 北側斜面	石器	4.6	1.9	0.9	7.7	刀形:折曲一削(細目)	A	1	
17	13	36	S002	石器	3.1	2.4	0.7	9.3	2辺一刃の削端	A	1	
17	13	37	1区 西	黒色土壌中	変形石器	(9.9)	5.6	3.3	(38.7)	刀形:火災	B	2
参考資料等												

第9表 石材略号一覧表

略号	石材
A	白岩
B	火成岩

第10表 产地等略号一覧表

略号	产地等
1	北上山地 中生代(白堊紀)
2	北上山地 中生代二疊系(後紀)

第11表 胸磁器観察表

回数 No.	場所 No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	層位	特徴	(数値):既存等
					高さ	内径	底径				
17	13	31	1区 北東側洛ち込み	黒色土壌	Pot. 1	小鉢	-	-	(1.6)	東部?	胸器、灰釉
17	13	32	1区 北東側 溝状土壌(現代)	北東面土	皿	-	-	-	(1.0)	北部	18~19世紀 灰釉、染付
17	13	33	1区 北東側 溝状土壌(現代)	1層 黒面土	楕球体	-	-	-	(35.4)	不明	近世以前 陶器

第12表 金属製品観察表

回数 No.	場所 No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	特徴	時期	(数値):既存等
					高さ	幅	厚さ				
17	13	41	T21	黑色土壌	板状鉄製品	13.8	1.9	0.3	38.5	片刃、一段が折れ曲る。	不明

第13表 銭貨観察表

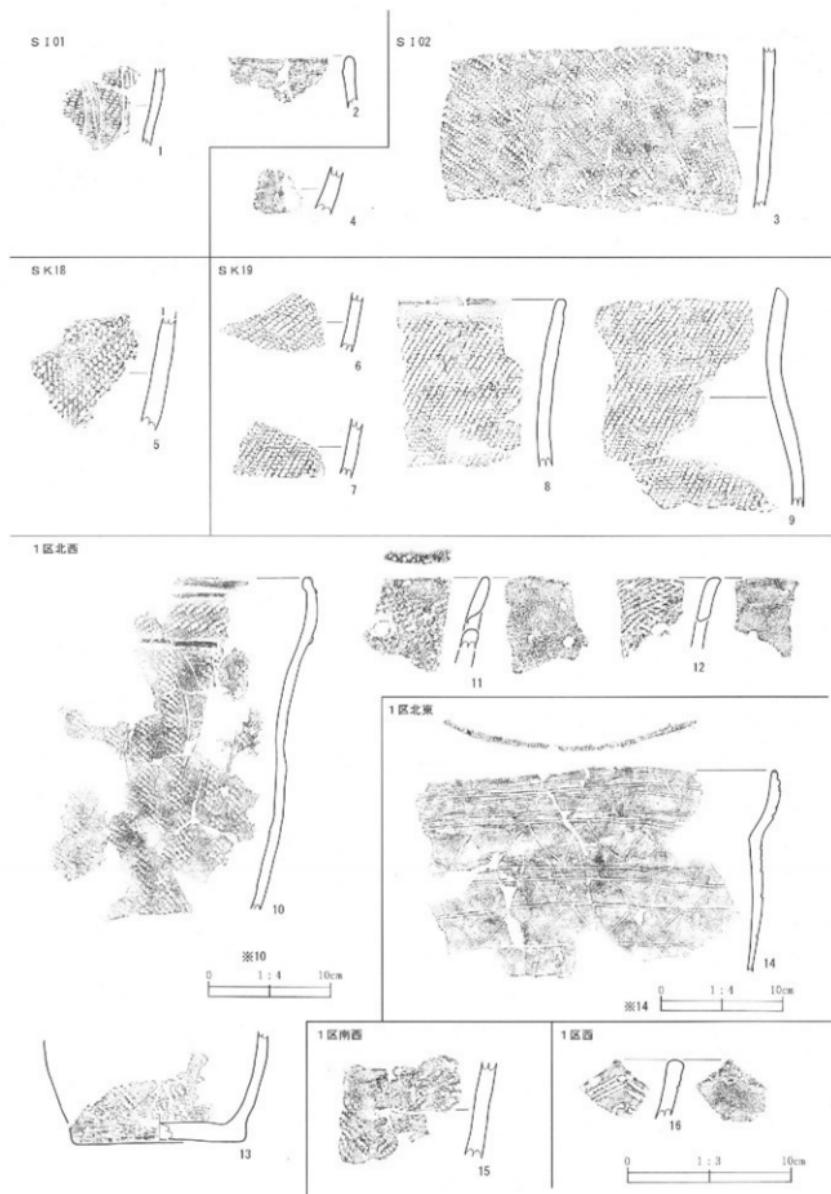
回数 No.	場所 No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	特徴	時期	(数値):既存等
					外径	内径	厚さ				
17	13	42	1区PP7	南半面土	元布道寺?	(2.35×2.30)	(0.73×0.72)	(0.15)	(2.3)	銅透光器	近世前半?

第14表 鉄津類観察表

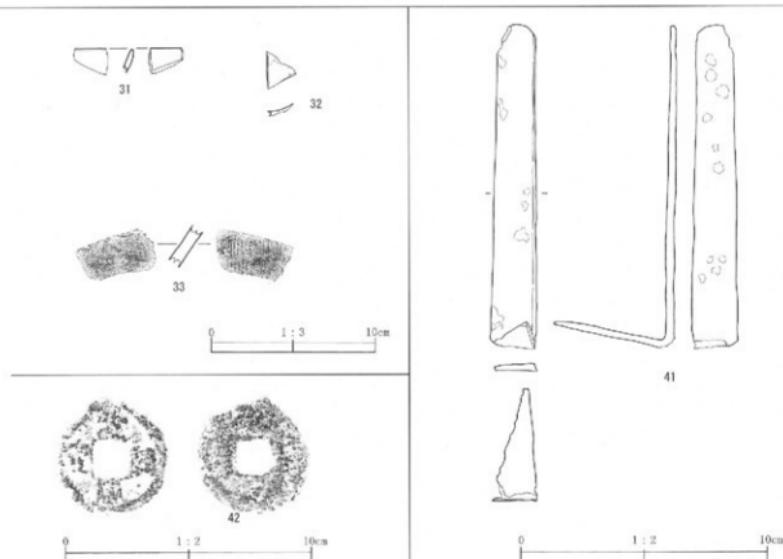
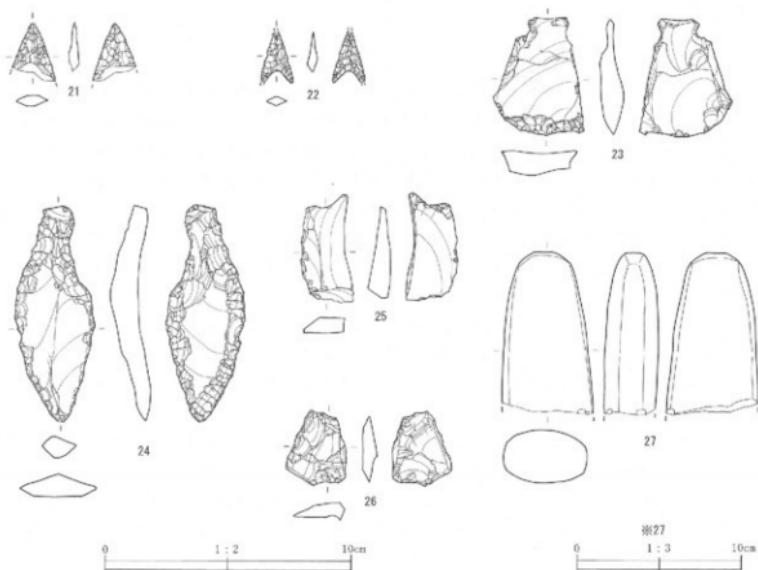
回数 No.	場所 No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	MC度数	特徴	備考
					大	中	小				
13	51	トレンチ5	II層	尾根土層	19.7	8	0	0	19.7		

第15表 塗装化物観察表

回数 No.	場所 No.	出土地点	層位	器種名	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
1	801	S10L-PP3	東半面土	ナラ				0.1	
2	803	S10L-BP	南西側 土壌サンプル	ナラ				0.1	
3	802	SK11	西半面土上位	クヲ				0.1	
4	803	SK19	北半面土上位	クヲ、ナラ				2.2	C14分析試料
5	804	SK19	北半面土5層	クヲ				0.1	
6	805	SK19	南半面土5層	クヲ				1.1	
7	806	SK01	Pot. 1	クヲ				0.1	
8	807	1区 西トレンチ南側	落ち込みはじめマサ上の上層	ナラ				1.7	
合計								4.1	



第16図 土器



第17図 石器、陶磁器、金属製品、錢貨

3 まとめ

(1) 遺構

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡2棟、陥し穴状遺構9基、土坑10基、落ち込み1箇所、柱穴25個である。今回の調査区は、大きく南側の山地（尾根部）と北側の低地部（谷部）に大別される。南側の山地は、南側から続く尾根の北端にあたり、北側の低地は、現在調査区の北側で八木沢川に向かって東流する沢に沿って形成された低地である。検出された遺構の占地は、尾根部からは堅穴住居跡と大形土坑、低地部からは陥し穴状遺構、土坑・落ち込み・柱穴群が確認された。

堅穴住居跡と大形土坑は、ともに縄文時代中期に属すると考えられる。同時期の集落の尾根上への占地は、八木沢II遺跡でも確認されている。尾根上ならどこでも良い沢ではなく、尾根の頂部から南斜面にかけて遺構がつくられていることに特徴がある（註1）。

落ち込みとした遺跡は、調査区域外の西側から延びているものと推測されるが、現在、西側から八木沢川に向かって東流する小沢の旧河道で、埋没沢の可能性がある。覆土への火山灰の混入と出土遺物から、縄文時代には埋没したものと考えられる。土坑や陥し穴状遺構は、この沢の埋没後につくられているようである。

陥し穴状遺構は、溝状の形態をもつものが多いが、規則的な配列は見出し難い。ただし、現在北側を流れている小沢は、かつては南側に蛇行して流れていたようで、その流路に沿って、陥し穴状遺構が形成されていたようにも見受けられる。陥し穴状遺構は、この沢に向かって形成された獣道上につくられていたのだと推測される。柱穴群は近世以降のものである。対岸の北側の平坦面と併せて、八木沢川沿いの平坦面は、近世には居住域として使用された可能性がある。

(2) 遺物

縄文土器・石器・陶磁器・金属製品・銭貨・鉄滓類・炭化材が出土している。全体として量は少ない。縄文土器は堅穴住居跡や大形土坑に伴って、中期後葉から末葉の土器が出土している。石器は、堅穴住居跡から出土した石匙1点、S I 02堅穴住居跡から出土した両極石器1点が中期の石器と推測される。出土した陶磁器は、遺構に伴うものではなかったが、出土した銭貨とともに、当遺跡における近世以降の生活の痕跡を示す遺物である。鉄製品の所属時期の詳細は不明である。鐵治滓が出土していることから、近接地で鍛冶関連の遺構が存在する可能性が高い。

炭化材は2点について放射性炭素年代測定を行った。縄文時代中期と推測されるSK19土坑出土資料は 4160 ± 30 yrBP、縄文時代と推測されるSK11陥し穴状遺構出土資料は、 5060 ± 40 yrBPとの鑑定結果を得ている。SK09土坑覆土中に堆積していた火山灰は、十和田a火山灰との分析結果を得ており、中揮火山灰と判断した現場での認識とは異なる結果となった。

(3) おわりに

今回の調査では、縄文時代の堅穴住居跡や貯蔵穴、陥し穴状遺構などが、尾根部と低地部で占地を異にして確認された。同様の事例は他の遺跡でも確認されるが、今後は、周辺域とのより詳細な比較検討を行い、各時期における遺構の占地の傾向を明らかにしていくことが課題である。

註

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2008『八木沢II遺跡・八木沢I遺跡発掘調査報告書』岩文振第528集

V 平成20年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 検出遺構の概要

平成20年度調査で検出された遺構は、土坑1基である。遺構の占地をみると、東向きの斜面に立地している。尾根上では遺構が検出されなかったことから、遺構の密度が希薄な地域であると判断される。

調査区の微地形をみると、尾根部と谷部からなる。便宜的に中央尾根部・西谷部・東尾根部・東谷部①・東谷部②と区分した。尾根はやせ尾根であり、谷部は急峻である。併せて平成17年度の試掘調査の結果も参考にすると、今回の調査区の遺構・遺物の密度は低いと判断されたことから、全域で試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された地点において範囲を拡張して調査を行う方針で進めた。

設定したトレンチは37本（T101～137）である。平成17年度の試掘調査においても同地点に33本のトレンチが入れられ、遺構・遺物の確認が行われている。両者を合わせると、調査区全体の約5割の範囲について確認が行われている。

(2) 土坑

東谷の斜面部で土坑1基が確認された。用途は不明である。

S K20土坑

遺構（第19図、写真図版16）

【位置・検出状況】 VI B 1 f グリッド。東斜面においてⅡ層で梢円形の広がりとして検出しており、陥し穴を想定して精査を進めたが、定型的な形状にならなかったことから、用途不明の土坑とした。

【重複関係】なし。

【規模・平面形】 規模は、開口部径190×110cm、底部径160×80cm、平面形は梢円形を呈する。深さは70cmである。

【覆土・堆積状況】 黒色土・黒褐色土で構成される。

【壁・底面】 壁・底面はⅡ層を掘り込んでつくられている。底面は西から東に緩く傾斜している。

【その他の付属施設】なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

1 検出遺構

第16表 トレンチ一覧表

No.	地区	検出手面	遺構	遺物	備考
101	西谷部	V層	なし	なし	
102	西谷部	Ⅲ層下位	なし	なし	斜面下位でプラン状のもの検出し、壁際でサブトレンチを設定したが遺構にはならなかった。
103	西谷部	Ⅲ層下位	なし	なし	
104	西谷部	Ⅲ～IV層	なし	なし	
105	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
106	内谷部	Ⅲ層	なし	なし	
107	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
108	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
109	西谷部	Ⅱ層～Ⅲ層	なし	縄文土器片（Ⅱ層黒色土下位出土）	サブトレンチ設定、基本土層②
110	西谷部	Ⅲ層下位？	なし	なし	
111	西谷部	Ⅲ層	なし	なし	
112	西谷部	Ⅲ層？	なし	なし	
113	中央尾根部	Ⅲ層	なし	なし	
114	東谷①	Ⅲ層	なし	なし	
115	東尾根部	Ⅲ～IV層	なし	なし	
116	東谷②	Ⅲ層	なし	なし	
117	東谷②	Ⅲ層	なし	なし	I・II層（黒色土・褐色土・暗褐色土）・Ⅲ層の堆積で、Ⅲ層暗褐色土中に中層浮石を確認。
118	東谷②	Ⅱ層	土坑1	なし	
119	中央尾根	IV層	なし	なし	
120	東谷③	Ⅲ層	なし	なし	サブトレンチ設定、基本土層③
121	東谷④	IV層	なし	なし	
122	東谷④	IV層	なし	なし	
123	東谷④	IV回	なし	なし	
124	東谷④	IV層	なし	なし	
125	東谷④	IV層	なし	なし	
126	中央尾根部	IV層	なし	なし	
127	中央尾根部	IV層	なし	なし	
128	中央尾根部	IV層	なし	なし	
129	中央尾根部	IV～V回	なし	なし	
130	西谷部	IV～V層	なし	なし	
131	中央尾根部	Ⅲ～IV層	なし	和鏡・鏡金具	サブトレンチ設定
132	中央尾根部	IV層	なし	なし	
133	中央尾根部	IV層	なし	なし	
134	中央尾根部	IV層	なし	なし	
135	中央尾根部	Ⅲ～IV層	なし	なし	
136	中央尾根部	IV層	なし	なし	
137	東尾根部	IV層	なし	なし	

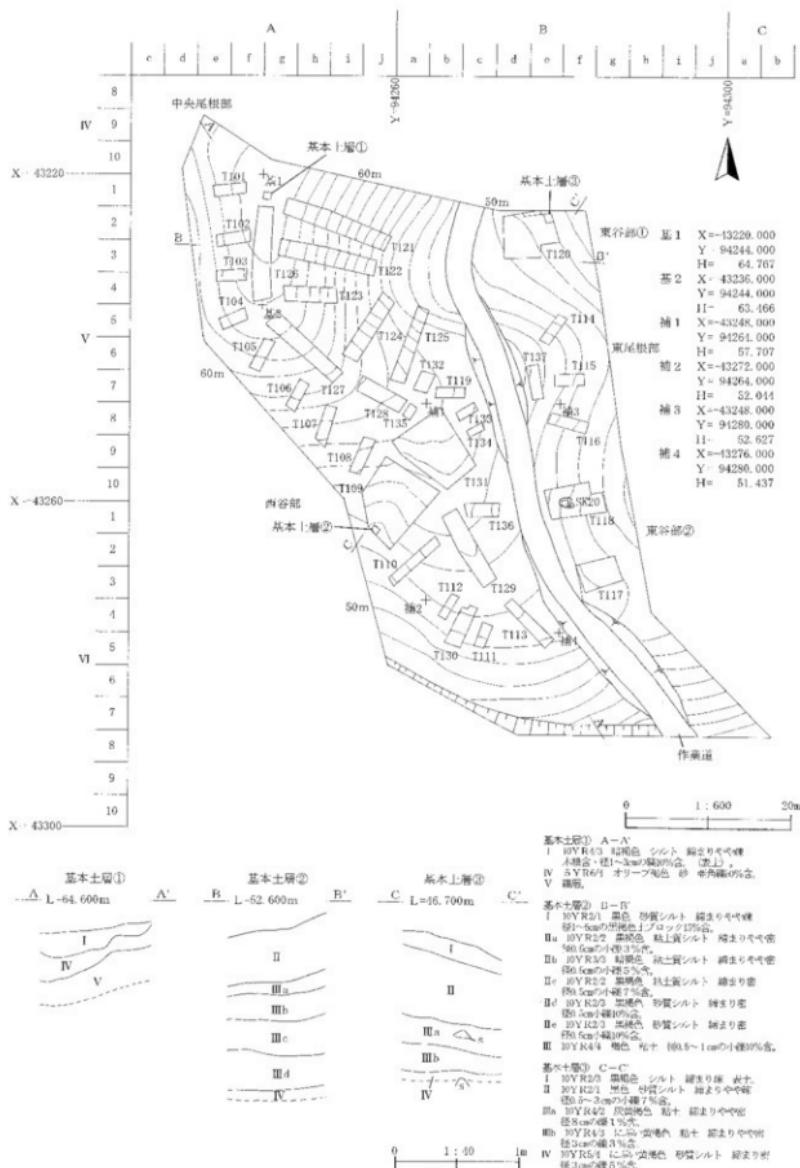
第17表 土坑観察表

(数値)：残存幅

図版 No.	地名 No.	遺構名	位置	検出手面	規模(cm)		底面の レベル (m)	底土の堆積状況 (上位→下位)	重複関係 (Ⅲ→Ⅳ)	堆積	付属施設	参考	時期	
					平面形	開口部 幅×深さ								
19	16	SK20	1VB11	Ⅲ	不整構造形	190×110 160×80	70.0	48.600	黒土、黒褐色土	なし	上	なし	東側の底面に落ち込み育り	不明

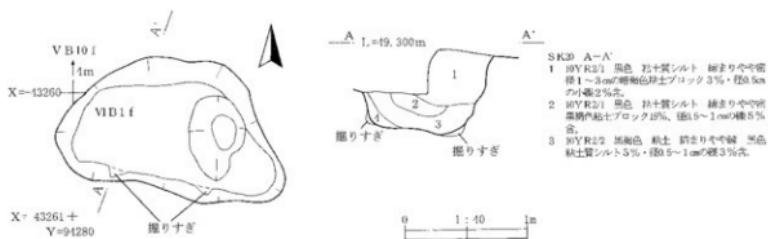
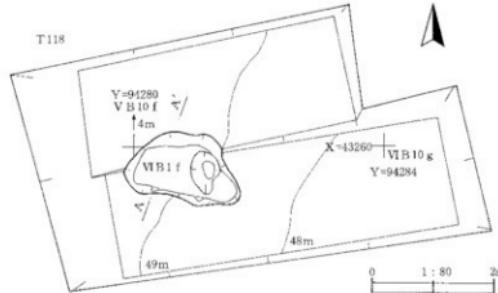
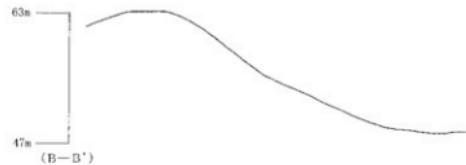
第18表 出土地点別土器重量表

N ₁	出土地点	層位	重量(g)
1	T109	Ⅱ層下位	129.8
2	T109	Ⅱ層暗褐色土	13.8
		小計	143.6



第18図 道構配置図(1)

1 検出造構



第19図 潜構配置図(2)、SK20土坑

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

平成20年度調査で出土した遺物は、縄文土器、金属製品、繊維質の遺物である。

(2) 縄文土器

縄文土器は、2袋(143.6g)出土した。トレンチ109試掘中の表土から出土したものである。1点を掲載した(第20図、写真図版17)。61は、底部から胴部が残る深鉢で、時期は中期頃と推定される。

(3) 金属製品

金属製品は2点出土している(第20図、写真図版17)。和鏡1点、飾金具1点である。トレンチ131の試掘の際、表土中から出土したものである。なお、重機で掘削作業を行い、掘削された表土中に遺物を確認したため、出土状況の写真記録などは無い。2点の出土地点は同じ地点である。また、出土地点及びその周辺において遺構は確認できていない。

和鏡

No.62は円形の和鏡である。文様から「草花飛鳥鏡」と命名される。円鏡で、直径9.0cm、縁高0.6cm、胎高0.1~0.2cm、重量89gである。この和鏡は次のような形態的特徴がある。縁が内傾式で細縁である。界囲は単圈で細縁である。鈕座は菊花座で、先端が平坦に調整されておらず、丸い形状である。鏡胎は薄手である。縁と鈕座の特徴は、平泉出土の和鏡と異なる特徴である。また、小形のわりに重量感がある。当資料は、いわゆる藤原鏡の可能性がある。時期は12世紀中頃~後半と考えられる。

鏡の表面(鏡面)の一部には布日の痕跡が付いているが、出土した時点で編物状の物質(No.64)が密着していた。整理時に鏡より取り外して、素材などの分析を行った。

なお、本資料は、両面の一部に縁青が確認できるが、全体として状態が極めて良好であるため質感を保って現状保存することとし、保存処理は行っていない。成分分析の結果は60頁を参照されたい。

飾金具

No.63は、飾金具で素材は銅製である。大鎧の鎧座金具で、総角付鎧座(あげまきつきかんざ)と推測される。径6.9cm、厚さ0.1cm、重量22.4gである。左右上下の四方が対称形で、四方にハート型の透しがある。中央に方形の穿があり、その周囲に直線的、また同心円状の擦痕が残る。小刻座と鎧が取り付けられていた痕跡と推測される。環座の線刻は肉厚である。表面に鍍金されており、色調は、やや白みがかる金色である。出土した時点で、裏面の一部に付着していた紙質の物質(No.65)は、整理時に取り外して素材の分析を行った。時期は平安時代後期(12世紀中頃)と考えられる。

なお、本資料は、出土した時点で地金が露出している部分があり、成分分析を行った後、できるだけ質感を損なわないように保存処理を行った。成分分析の結果は60頁を参照されたい。

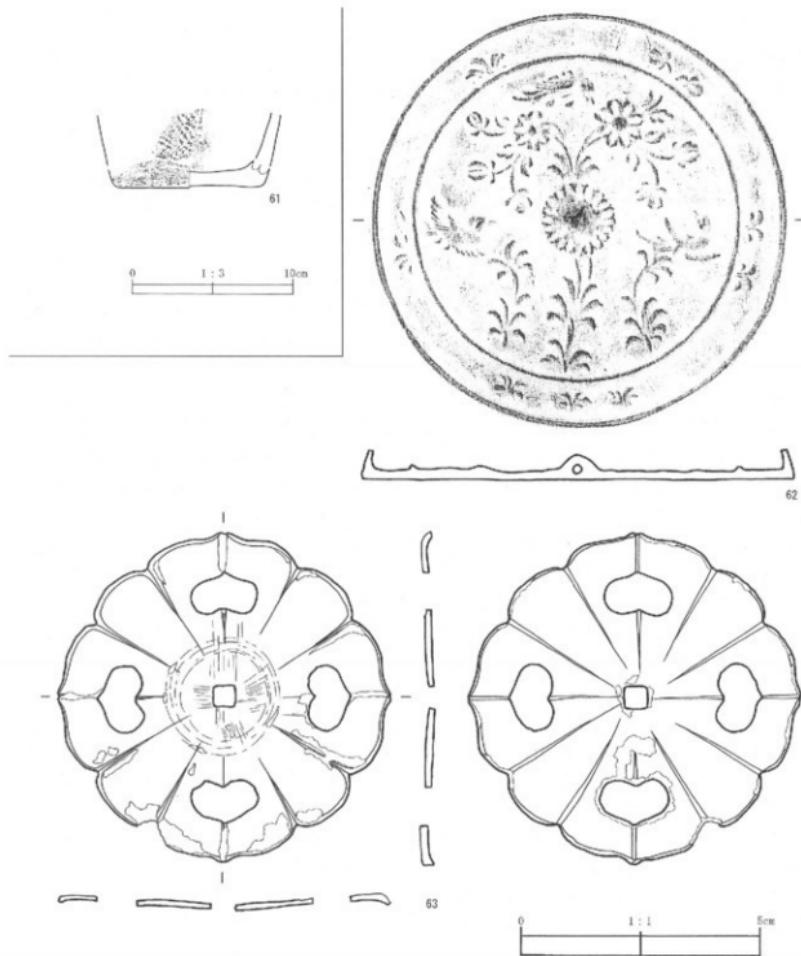
(4) 繊維質の遺物

編物状の物質

No.64は、和鏡(No.62)の鏡面の一部に密着していた、大きさ2cm四方余り、重量1g未満の編物状の物質の一部である。分析の結果、漆が塗付された絹布であるとの鑑定結果を得ている(60頁)。

紙質状の物質

No.65は、飾金具(No.63)の裏面の一部に付着していた、大きさ2cm四方余り、重量1g未満の紙質状の物質の一部である。分析の結果、墨書きが施された楮紙であるとの鑑定結果を得ている(60頁)。



第20図 土器、金属製品

第19表 土器観察表

測定番号	寸法	測定番号	寸法	出土地点	断面	器種	計測値(cm)	又(単体)の特徴	(単体) : 検定値			数値(: 検査結果)
									横	高さ	底面	
17	17	41	下160	復原工位	横断	(A)	—	—	—	—	—	削：E. B. 線？、底：ナメ

記号
底面の名称。口縁：口縁部、壁：側面、底：底部、脚：脚部、蓋：蓋部。
又種：單体測定：單体個別測定、複合測定：易差性性質、單物體：半精緻造形、多物體：多精緻造形、複合：複合性質、複合複合：複合性質、複合複合複合：複合性質、複合複合複合複合：複合性質。

内面調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

断面調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

外側調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

内部調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

内面調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

外側調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

内部調査：M：（なし）、N：（なし）、O：（なし）、P：（なし）、Q：（なし）、R：（なし）、S：（なし）、T：（なし）、U：（なし）、V：（なし）、W：（なし）、X：（なし）、Y：（なし）、Z：（なし）。

第20表 金属製品観察表

測定番号	寸法	測定番号	寸法	出土地点	断面	器種	計測値(cm)	又(単体)の特徴	(単体) : 検定値			検査結果
									横	高さ	底面	
32	32	42	レシテ131	1番大土	横断	4.0	0.9	3.1~3.2	横	—	—	未作成

3 ま と め

(1) 遺構

平成20年度調査で検出された遺構は、斜面部で確認された土坑1基である。地形的にも遺構密度が高い個所ではないと判断される。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

(2) 遺 物

繩文土器1点、和鏡1点・飾金具1点が出土した。和鏡・飾金具とも遺構に伴うものではないが、いずれも形式的に12世紀に属する遺物と判断される。和鏡は「秋草飛鳥鏡」と命名されるものである。和鏡の形態的特徴は、これまで平泉遺跡群で出土した和鏡とは異なる部分がある。製作地の違いが反映されている可能性がある。平泉以外で出土している12世紀に属する和鏡も含めて、今後検討していく必要がある。飾金具は、大鉢の銀座金具で、総角付銀座（あげまきつきかんざ）と判断された。また、和鏡は漆が塗付された縞物に包まれていた可能性があり、飾金具は、墨書が施された楮紙に包まれていた可能性がある。希少な出土事例であり、今回の出土状況の所以について引き続き検討していく必要がある。

(3) お わ り に

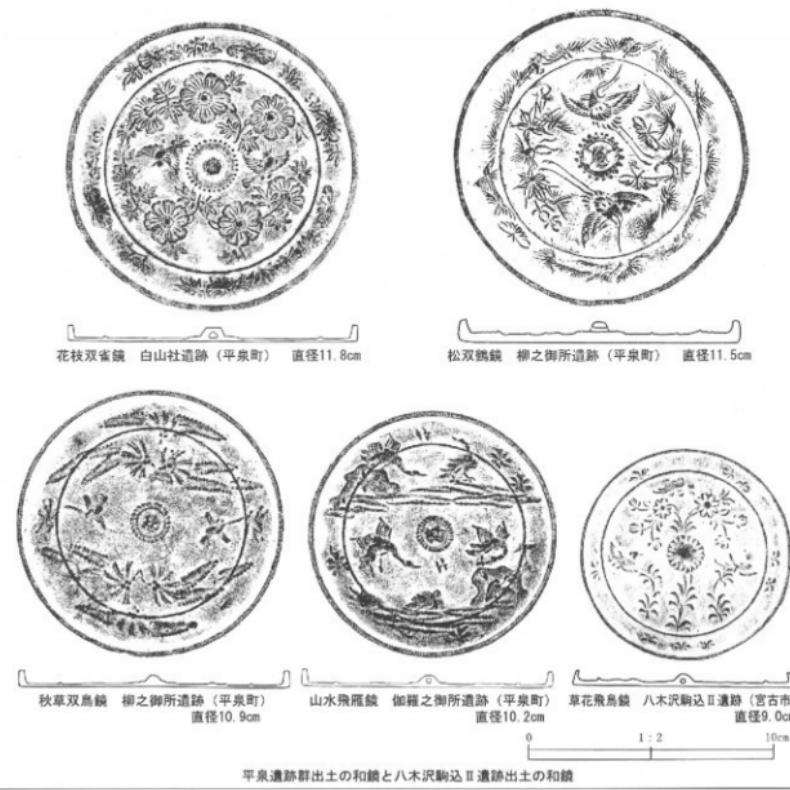
平成20年度調査の成果は、遺構・遺物とともに数量は少なかった。検出された遺構は、斜面部で確認された土坑1基であり、本来、地形的にも遺構密度が高い個所ではないと判断される。遺物としては、12世紀と判断される和鏡1点・飾金具1点が出土したことが特筆される。南側に隣接する八木沢野来遺跡第1次調査では、やはり明確な遺構に伴うものではないが、12世紀の白磁碗片が出土している（註1）。遺構は未確認ながら、八木沢地区において近接した地点で12世紀の遺物が相次いで出土したことは、12世紀の宮古地域において、確實に平泉藤原氏に関わる人々が活動していたことが推測される（註2）。今後の周辺地域の調査において、当該時期の遺構・遺物の確認に注意が必要である。

註

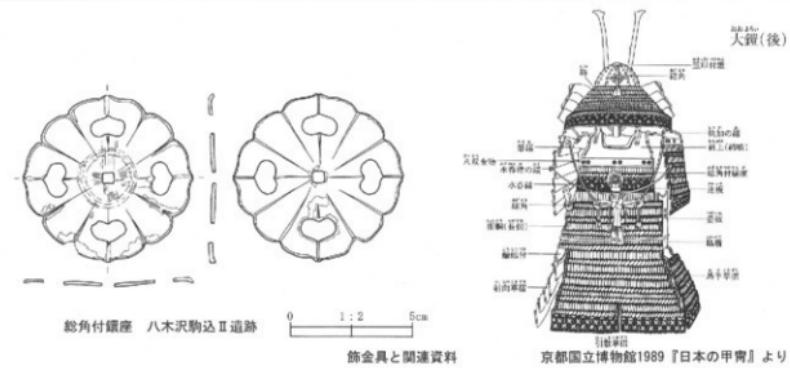
- (1) 岩文振第511集
- (2) 宮古市域の遺跡でも、巖船山・赤前I牛子沢・払川I遺跡などの調査において、12世紀代と推測される渥美・常滑の壺・鉢類の遺物が出土している。『都市・平泉一成立とその構成』P222~224。

参考文献

- 中野政樹 1969『和鏡』日本の美術42、至文堂
 京都国立博物館編集 1989『日本の甲冑』(株)大塚工藝社
 久保智康 1999『中世・近世の鏡』日本の美術394、至文堂
 平泉町文化財センター 2000『鏡』『柳之御所資料館常設展示図録』
 久保智康 2002『飾金具』日本の美術437、至文堂
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『平成17年度発掘調査報告書』岩文振第490集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『賽の神II遺跡・賽の神遺跡・下大谷地I遺跡・八木沢野来遺跡第1次発掘調査報告書』岩文振第511集
 相原康二 2009『岩手県内出土の鏡鑑類について』『紀要XXIV』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 山岸孝夫 1994『日本甲冑の実証的研究』日本甲冑の実証的研究刊行会
 日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集 2001『都市・平泉一成立とその構成』



平泉遺跡群出土の和鏡と八木沢駒込II遺跡出土の和鏡



飾具と関連資料

京都国立博物館1989『日本の甲冑』より

第21図 和鏡、飾具と関連資料

VII 平成21年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 平成21年度調査区の概要

今回の調査区は遺跡のはば中央部分にあたる。その地形は遺跡の中でも最も高い山頂部、山頂より主に東側に広がる斜面部、さらにその下に広がる平坦面（低位面）からなる。この平坦面（低位面）は斜面部と八木沢川との間にあり、それはほど広いものではない。調査区の現況は何れも杉林である。

山頂部からは土坑が1基検出されている。斜面部は中摺火山灰が残っている場所があるなど、堆積土に後世の影響が少なく、遺構が良好な状態で残されていると期待されたが、今年度の斜面部の調査区内には遺構は見られなかった。低位面では遺物が出土するものの遺構はなく、八木沢川の旧河道であったことが分かった。

(2) 土坑

1号土坑（第23図、写真図版18）

【位置・検出状況】山頂部にあたる、A10 g グリッドに位置し、地山面で検出した。

【規模・形状】1.34×1.28mの不整な円形をしている。深さは33cmあり、底面からやや外傾して立ち上がり、2段底になっている。

【埋土】地山ブロックを多量に含む黒褐色土や黒色土からなる。人為堆積である。

【出土遺物・時期】出土遺物はなく、時期を特定する資料を欠く。

(3) 低位面

遺跡の東側にあたり、本遺跡の中では最も低い面になる。八木沢川と斜面部とに挟まれるようにあり、やや南北に細長い半円状の地形である。第22図にあるように要所にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認している。何れのトレンチからも遺構は確認できなかった。T 8やT 10では斜面部からの連続する地形がみられた。その他の場所ではT 11やT 12のように堆積土は砂と泥が交互に堆積するような水性堆積を中心としており、この平坦面は八木沢川によって運ばれた土砂と斜面部から流れ込んだ土砂によって構成されている。のことから低位面は八木沢川の旧河道であったと言えるが、具体的な時期については底面付近になると遺物が出土しなくなるため不明である。

2 出土遺物

67は縄文時代前期前葉頃の深鉢の破片である。非結束の単節による羽状縄文を地文とし、胎土には繊維を含んでいる。66は縄文時代後期以降の土器片と思われる。単節R Lを地文としている。68は石鏸、69は磨製石斧である。

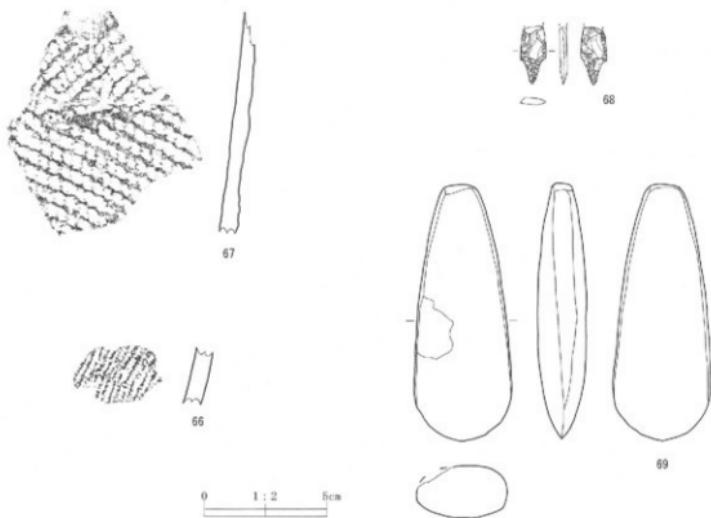
3 まとめ

本遺跡はこれまでの調査により遺跡の北側には縄文時代中期後葉から末葉の集落が広がっていることが明らかとなった。また遺跡の南側では中世初頭の和鏡が出土し、この時期の人々による何らかの活動があったことが想定された。今年度は遺跡の西端部から中央部、東端部までを調査したことにな

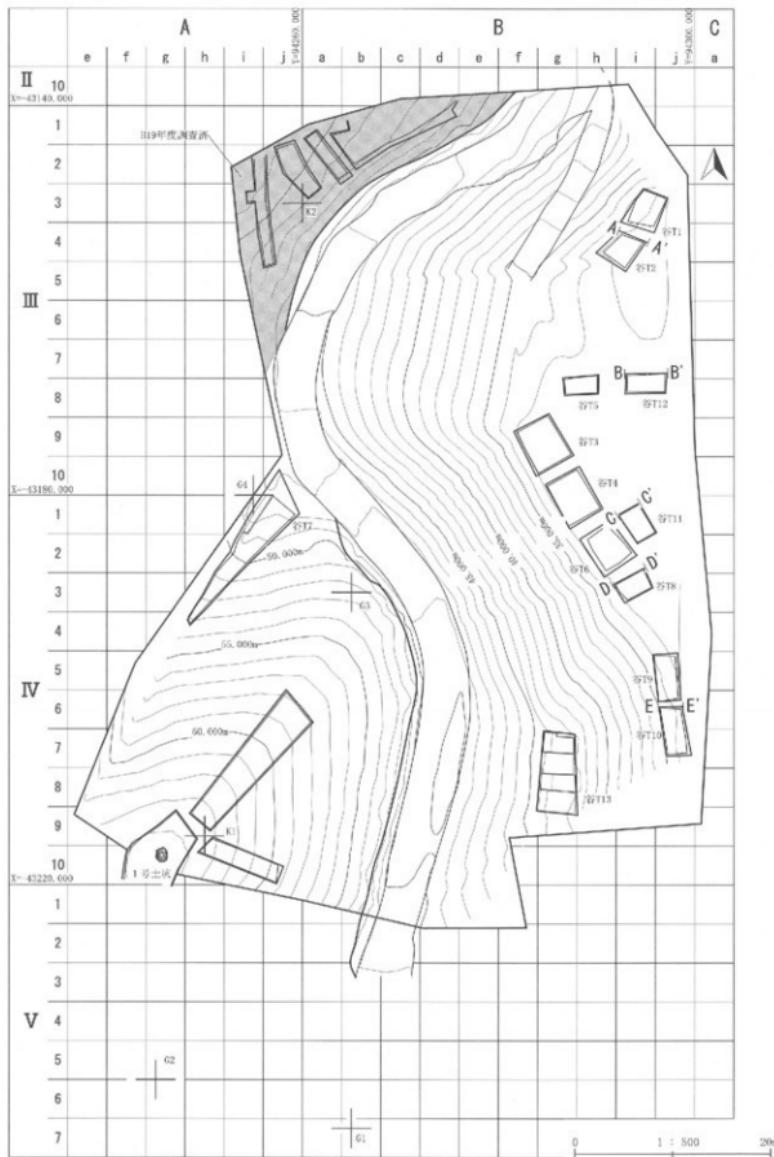
り、北側にある縄文時代の集落が展開してくるものと予想された。結果として遺構の広がりは認められず、縄文時代の遺物が散布するに留まつた。遺跡東端にあたる低位面には後晩期の遺構が認められるのではないかと予想していたが、八木沢川の旧河道が見つかり、遺構は確認できなかつた。この八木沢の旧河道も基本的には遺物を殆ど含まず、いつ頃の河道であったのかは不明である。

山頂部では土坑が1基検出されている。出土遺物はない。前年度の第2次調査で12世紀代の和鏡と飾金具が南側の斜面から出土していたため、山頂部には経塚のような施設を想定していた。結果として、遺物を伴わない土坑が1基検出しただけであるが山頂部に土坑を掘る事例は縄文時代などには殆どなく、この遺跡の場合はやはり12世紀の和鏡・飾金具と関連付けて考えるのが最良であろう。根拠としては弱いが中世初頭に山頂部及びその周辺で和鏡や飾金具を用いた何らかの儀礼行為がなされ、1号土坑もその際に構築された施設の一部であったと考えたい。

隣接する八木沢野米遺跡からも12世紀代の白磁片が出土しており、この地域では中世初頭頃に何らかの人々の営みがあったことは疑いない。

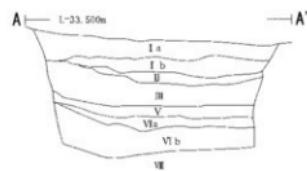


第22図 出土遺物

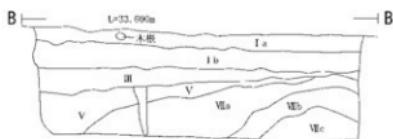


第23図 平成21年度調査区全図

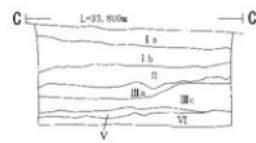
谷T2



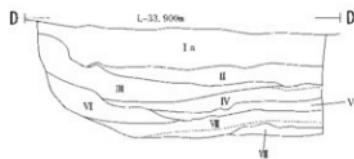
谷T12



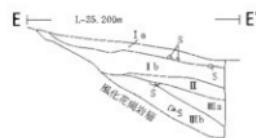
谷T11



谷T8



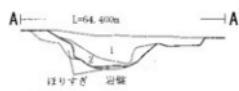
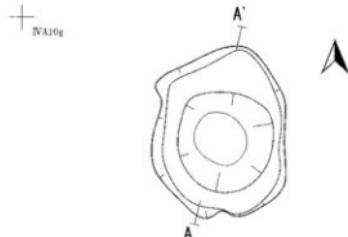
谷T10



GT2 × 8 × 10 × 11 × 12
 I a 107R2/3 黄褐色土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 I b 37R5/2 重原色灰土。下位には少し黄褐色土。粘性・緻りやや有。
 II 107R2/2 黒褐色灰土。その下に107R2/3 黄褐色土。粘性・緻りやや有。
 III 107R2/1 黑褐色土。重原色灰土。下位には少しだけ黄褐色土が混入する。
 IV 107R2/3 黑褐色土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 V 107R1/2 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 VI 107R2/2 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 VII 107R2/3 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 VIII 107R2/4 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 IX 107R2/5 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 X 107R2/6 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XI 107R2/7 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XII 107R2/8 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XIII 107R2/9 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XIV 107R2/10 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XV 107R2/11 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XVI 107R2/12 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XVII 107R2/13 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XVIII 107R2/14 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XVIX 107R2/15 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。
 XX 107R2/16 黑褐色土。重原色灰土。マサ土多量に含む。粘性・緻りやや有。

0 1 : 60 2a

1号土坑



1号土坑(入島地塊)
 1 107R2/1 黑褐色土/ロクタ土に含む。粘性・緻りやや有。
 2 107R2/2 卵白土。堆山ブロック多量に含む。粘性・やや有。緻りやや有。

0 1 : 40 1a

第24図 トレンチ断面、土坑

VII 分析・鑑定

1 放射性炭素年代測定（平成19年度調査）

放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定） 八木沢駒込Ⅱ遺跡

（株）加速器分析研究所

（1）遺跡の位置

八木沢駒込Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駒込（北緯39°36'、東経141°55'）に所在する。

（2）測定の意義

遺構の年代を知る手掛かりとする。

（3）測定対象試料

測定対象試料は、SK11土坑の西半覆土上位から出土した木炭（802：IAAA-71936）とSK19土坑の北半覆土1層から出土した木炭（803：IAAA-71937）、合計点である。

（4）化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（5）測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシ

ユウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹⁴C/¹³Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{14}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される¹³Cの値を用いることもある。
 $\delta^{14}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_{\text{S}} - ^{14}\text{A}_{\text{R}}) / ^{14}\text{A}_{\text{R}}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_{\text{S}} - ^{14}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{14}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴AS：試料炭素の¹⁴C濃度：^{(14C/13C)S}または^{(14C/13C)S}

¹⁴AR：標準現代炭素の¹⁴C濃度：^{(14C/13C)R}または^{(14C/13C)R}

$\delta^{14}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹⁴C濃度（¹⁴A_S = ¹⁴C/¹³C）を測定し、PDB（白亜紀のペリムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した¹⁴Cを用いることもある。この場合には表中に「[加速器]」と記注する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{14}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの¹⁴C濃度（¹⁴A_S）に換算した上で計算した値である。（1）式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{14}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_{\text{R}} = ^{14}\text{AS} \times (0.975 / (1 + \delta^{14}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_{\text{S}} \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_{\text{R}} \times (0.975 / (1 + \delta^{14}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_{\text{S}} \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_{\text{S}} - ^{14}\text{A}_{\text{R}}) / ^{14}\text{A}_{\text{R}}] \times 1000 (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない¹⁴Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 100 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ${}^14\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(7) 測定結果

SK11 の木炭 (802 : IAAA-71936) の ${}^14\text{C}$ 年代が 5060 ± 40 yrBP、SK19 の木炭 (803 : IAAA-71937) の ${}^14\text{C}$ 年代が 4160 ± 30 yrBP である。暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、802 が $3950 \sim 3790$ BC、803 が $2880 \sim 2840$ BC (11.5%)、 $2820 \sim 2740$ BC (35.4%)、 $2730 \sim 2670$ BC (21.3%) である。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素量も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ${}^{14}\text{C}$ data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
 Reimer P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

表 1

IAA Code No.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-71936	試料採取場所 : (宮古市) 八木沢駆込 II 遺跡 SK11 西半覆土上位	Libby Age (yrBP) : $5,060 \pm 40$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) : -32.85 ± 0.85
	試料形態 : 木炭	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) : -467.4 ± 2.4
	試料名(番号) : 802	pMC (%) : 53.26 ± 0.24
#2016-1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -476.0 ± 2.1 pMC (%) : 52.40 ± 0.21 Age (yrBP) : $5,190 \pm 30$
IAAA-71937	試料採取場所 : (宮古市) 八木沢駆込 II 遺跡 SK19 北半覆土上位	Libby Age (yrBP) : $4,160 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) : -26.26 ± 0.46
	試料形態 : 木炭	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) : -404.4 ± 2.3
	試料名(番号) : 803	pMC (%) : 59.56 ± 0.23
#2016-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) : -405.9 ± 2.3 pMC (%) : 59.41 ± 0.23 Age (yrBP) : $4,180 \pm 30$

表 2 参照資料: 暦年較正年代

IAA Code No	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71936	802	5060 ± 35
IAAA-71937	803	4162 ± 31

ここに記載する Libby Age(年代値)と誤差は下1桁を丸めない値です。

2 火山灰分析（平成19年度調査）

八木沢駒込Ⅱ遺跡で検出された火山灰の分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県宮古市八木沢駒込Ⅱ遺跡は、宮古湾に注ぐ河川の一つである八木沢川上流域の右岸に位置する。今回の発掘調査では、縄文時代の土坑等の遺構が検出され、それらに伴う土器などの遺物が出土している。

今回の分析調査では、土坑の覆土中に認められた火山灰（テフラ）とされる堆積物について、その碎屑物の性状を明らかにし、テフラである場合には、既知のテフラとの対比を行い、各遺構の年代資料を作成する。

（1）試料

試料は、SK09土坑の覆土の1層より採取された火山灰とされている堆積物（試料No.1）の1点である。試料の外観は、にぶい黄橙色を呈する砂質シルトである。発掘調査所見では、縄文時代前期の約6000年前（町田・新井,2003）に十和田カルデラより噴出した、十和田中津テフラ（To-Cu）に対比される可能性があると考えられている。

（2）分析方法

ここでは、碎屑物全体の状況を捉るためにテフラの検出同定分析を行い、その特性の一つとして重軽鉱物組成を求め、さらに火山ガラスが含まれている場合には、火山ガラスの屈折率の測定を行う。各分析の処理手順は以下の通りである。

1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

2) 重軽鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンクグステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物および軽鉱物を偏光顕微鏡下にてそれぞれ250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落

射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。軽鉱物における「その他」も同様の粒子を指す。火山ガラスは、便宜上軽鉱物分に入れ、その形態分類は、上述のテフラ分析に準ずる。

3) 屈折率測定

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) 結 果

1) テフラの検出同定

試料No.1には、中量の軽石と多量の火山ガラスが認められた。軽石は、最大径約0.8mm、白色を呈し、発泡やや不良なものと、白色を呈し、発泡のやや良好なものとが混在する。火山ガラスは、ほとんどが無色透明の塊状の軽石型であるが、微量の無色透明のバブル型も認められた。また、試料中には、軽石と径が同程度の灰黒色および赤褐色を呈する比較的新鮮な安山岩の岩石片が微量認められた。

2) 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成では、斜方輝石と不透明鉱物が40%程度の割合で多く、これに約20%の单斜輝石が伴われる。軽鉱物組成では、風化変質鉱である「その他」を除けば、軽石型火山ガラスと長石が同量程度で主体をなし、極めて微量の石英が含まれる。

3) 屈折率測定

結果を図2に示す。火山ガラスの屈折率は、n1.505-1.510のレンジに入り、n1.506-1.507にモードがある。

(4) 考 察

今回の分析結果により、本試料は細粒の軽石と軽石型火山ガラスを主体とし、兩輝石からなる重鉱物組成をもつテフラであると考えられる。上述した火山ガラスの形態の特徴および屈折率、さらに本遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981;1984）、Arai et al. (1986)、町田・新井（2003）など）との比較から、検出されたテフラは十和田aテフラ（To-a）の降下堆積物に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火碎流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火碎流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981）。前述したように、試料には細粒ではあるが軽石が多量含まれていたことから、本遺跡の位置する宮古市付近は、To-aが軽石質テフラとして分布する範囲に入っているといえる。また、町田ほか（1981）は、淡緑色・淡褐色を呈するn1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とするTo-aの上部火山灰層は南方へ広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとしている。今回の試料では、屈折率測定結果から、低屈折率の火山ガラスは含まれていないことがわかる。なお、To-aの噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。

前述したように、発掘調査所見では、本試料はTo-Cuの可能性があるとされた。To-Cuも細粒の軽

石と軽石型火山ガラスを主体とし、重鉱物組成も両輝石からなる。しかし、火山ガラスの屈折率は、町田・新井（2003）などの記載によればn1.510-1.514（モードn1.511-1.513）であり、To-aのそれとは明らかに異なるレンジを示す。したがって、今回の試料がTo-Cuに由来する可能性はほとんどないと見える。

ところで、今回の試料は土坑覆土中から採取されている。上記の通り分析結果からみて、純度の良いTo-aの堆積物であると判断される。添付資料で詳細不明はであるが、仮に上下の覆土に広く火山灰粒子が拡散していないとすれば、土坑の埋積途上でTo-aの噴出があり、土坑内にあった凹部に降下堆積したテフラ層であると推定される。この場合、この土坑はTo-aの噴出した10世紀には、すでに廃棄されてから時間が経過し、埋積が進行していた状態であったと考えられる。すなわち、土坑の構築年代は、To-aの降灰以前であるといえる。しかし、現時点では、To-a降灰以前のいつ頃かという時期については、推定のための指標は得られていない。土坑の時期特定には、今後の周辺域における類例の分析調査例の蓄積がのぞまれる。

引用文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II—Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido—.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌, 101, 123-133.
- 早川山紀夫・小山真実, 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起った二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—火山, 43, 403-407.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編, 火山灰アトラス.東京大学出版会 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ.科学, 51, 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田清志・達藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ.渡辺直総(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎, 865-928.



図1 重量鉱物組成

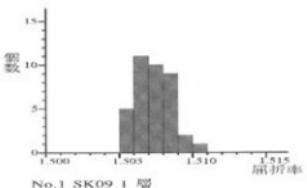
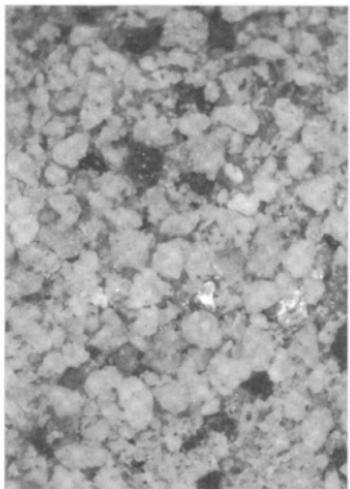
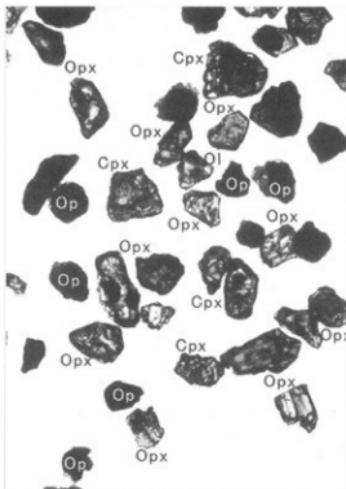


表1 重量鉱物分析結果

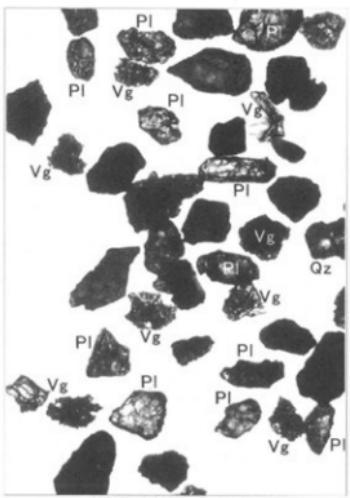
試料No.	遺構名	層位	カラン石	斜方輝石	单斜輝石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
1	SK09	1層	2	93	60	85	10	250	0	0	43	4	44	159	250



1. 軽石（試料No. 1 SK091層）



2. 軽石（試料No. 1 SK091層）



3. 軽鉱物（試料No. 1 SK091層）

Ol：カンラン石, Opx：斜方輝石, Cpx：単斜輝石.

Op：不透明鉱物.

Vg：火山ガラス, Qz：石英, Pl：斜長石.



写真図版 火山灰分析：軽石・重鉱物・軽鉱物

3 金属製品・繊維質の遺物の成分分析（平成20年度調査）

八木沢駒込遺跡Ⅱ・出土和鏡・飾金具の分析

（財）元興寺文化財研究所

八木沢駒込Ⅱ遺跡出土の和鏡（草花飛鳥鏡）・飾金具（総角付銀座）、および、繊維状物質の成分分析について報告します。

（1）分析対象

八木沢駒込Ⅱ遺跡出土の和鏡・飾金具各1点、および、繊維状物質（それぞれに付着し別容器で保管されていたもの）

（2）分析内容

和鏡・飾金具を蛍光X線分析装置で成分分析し、繊維状物質を実体顕微鏡、生物顕微鏡観察によつて同定した。

（3）使用機器と測定条件

▶ エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）【SIIナノテクノロジー SEA5230】

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

測定は大気中でφ1.8mmのコリメータを用い、45kVの管電圧で300秒間行った。この条件は大気中でカルシウム（Ca）より重い元素を検出できる。

なお、X線ターゲットはモリブデン（Mo）である。

また、定量はファンダメンタル・パラメータ法^{*}により行った。

▶ 全反射フーリエ変換型赤外分光光度計（ATR-FTIR）【SensIR Technologies TravelIR】

試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の局波数の吸収を解析し、化合物を同定する。

全反射方式により、透過法では測定できない固体試料に適する。検出器DLATGSを用い、分解能4cm⁻¹で測定した。

▶ 生物体顕微鏡【オリンパス BX50】

▶ 実体顕微鏡【ライカ MZ16・キーエンス VHX200】

▶ 赤外線撮影機器

カメラ：マミヤRZ67Pro、レンズ：マクロマミヤセコールZ 140mm F4.5

フィルター：フジIR-90、デジタルバック：コダックDCSプロバックPLUS

ストロボ：コメット：CB-24、画像処理：Photoshop ver.5.5（Mac OS 9.2.1）

※ ファンダメンタル・パラメータ法（FP法）

試料の構成元素とその組成からそれぞれの蛍光X線強度を理論的に知ることを利用することで、未知試料の元素組成を推定する簡易定量法である。

(4) 結果と考察

1) 和鏡（草花飛鳥鏡）

XRFによる分析箇所を図1に示した。その結果、図2～7に示すように鉄(Fe)、銅(Cu)、ヒ素(As)、銀(Ag)、スズ(Sn)、アンチモン(Sb)、鉛(Pb)を検出した。青銅鏡と考えられた。検出元素のうち、スズが地金に含有されているものか、スズ磨きなどで表面に付着したものかの判別はできなかつた。

今回の分析は非破壊で得た表面情報であるため、資料内部の成分比とは異なると思われるが、これらの検出元素が和鏡にはほぼ一様に含まれるものと仮定してFP法により定量計算を行つた（表1）。和鏡は概ね重量基準で、鉄0.3～0.4%、銅60～75%、ヒ素7～10%、銀0.2～0.3%、スズ20～30%、アンチモン0.1～2%、鉛1～2%を含む。和鏡の制作年代は12世紀と考えられ、その時代の青銅鏡として矛盾しない分析結果であった。

2000年度に分析した平泉町里遺跡出土の和鏡からは、今回分析した和鏡から検出したと同じ7種類の元素を検出した。そこで、両者を定量的に比較したいが、平泉町里遺跡出土の和鏡は劣化が進行し、その組成は当初の組成から大きく変化しているものと思われた。したがつて、定量的には比較できないものと判断した。

表1 八木沢駄込II遺跡出土和鏡のXRF分析結果から
FP法により求めた成分の定量値（重量%）

元素 分析箇所	鉄 Fe-K α	銅 Cu-K α	ヒ素 As-K β	銀 Ag-K α	スズ Sn-K α	アンチモン Sb-K α	鉛 Pb-L β	合計
鏡背①	0.27	62.64	9.43	0.27	25.12	0.23	2.04	100
鏡背②	0.31	56.91	9.67	0.35	30.28	0.17	2.31	100
鏡背③	0.47	73.51	6.50	0.22	18.12	0.11	1.07	100
鏡面④	0.30	74.38	7.04	0.21	15.86	0.04	2.17	100
鏡面⑤	0.32	65.22	9.48	0.26	22.70	0.08	1.94	100
鏡面⑥	0.36	59.42	9.44	0.34	28.19	0.18	2.07	100

2) 飾金具（総角付鏡座）

XRFによる分析箇所を図8に示した。その結果、図9～13に示すように鉄、銅、ヒ素、銀、金(Au)、水銀(Hg)を検出した。

金色部分（分析箇所a）からは金を強く検出、剥がれた部分からは銅を検出し、金を検出できなかつたことから、飾金具は金銅製品であった。金とともに水銀を検出したことから、鍍金されたものであると考えられた。

また、飾金具の制作年代（12世紀）と銀の検出強度から、銀は銅や金に含まれていたものであると思われた。

3) 和鏡付着纖維状物質

和鏡に付着していた纖維状物質（分析用細片試料、図14）を実体顕微鏡で観察した。観察面（図15）は纖維状物質（図16）と黒色膜（図17）に分離できた。纖維状物質は平織りで、織り密度（1cm²当

たりの経緯糸の本数)は約50×40であった(経緯糸の区別ができなかったため、糸の数が多いほうを経糸とした)。

採取した繊維状物質から黒色膜を分離し、それぞれの微量片をATR-FTIRで分析した。繊維状物質から1620、1510cm⁻¹に特徴的な絹の吸収(図18)を、黒色膜からは1650～1550、1380、1270cm⁻¹に特徴的な漆の吸収(図19)を得た。

さらに、別に採取した微量片をエポキシ樹脂で包埋後、ミクロトームを用いて光が透過する薄い塗膜断面の切片を作製した。切片作製時に繊維状物質と黒色膜が分離したため、それより永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による透過観察を行った。繊維状物質にはやや丸みを帯びた三角形の絹断面(図20)が見られ、黒色膜には約30μmの松煙や油煙等の煤を混ぜた黒色漆1層(図21)が観測された。

よって、和鏡に付着した本資料は、漆が塗布された絹布であると考えられた。

4) 飾金具付着繊維状物質

飾金具に付着していた繊維状物質(分析用細片試料、図22)を実体顕微鏡で観察した(図23)。明確な織りは観測されず、紙であると考えられた。微量片をエポキシ樹脂で包埋後、ミクロトームを用いて光が透過する薄い塗膜断面の切片を作製した。永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による透過観察を行った(図24)。繊維断面が楕円形でルーメンがみられることから大麻や苧麻、楮であることが考えられた。詳細な紙繊維の同定を高知県立紙産業技術センターに依頼した。劣化等により染色液による断定はできなかったが、繊維自体の凹凸により楮の可能性が高いとされた。

また、資料が紙である事や表面観察の結果、黒い線状のものは墨書きと考えられた。そこで、赤外線写真を撮影した(図25)。

(文責 川本耕三・山田卓司)

(5) 分析データ

1) 和 鏡 (草花飛鳥鏡)

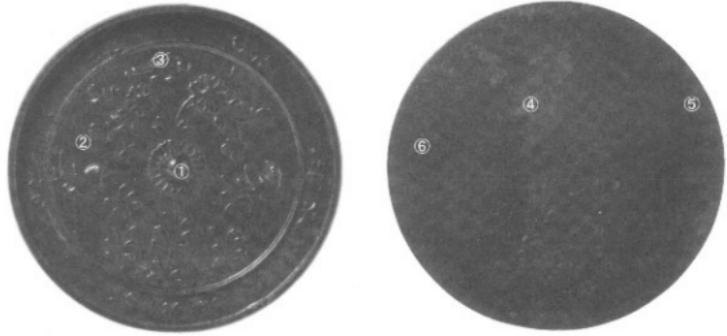


図1 八木沢駿込II遺跡出土 和鏡（草花飛鳥鏡）の分析箇所

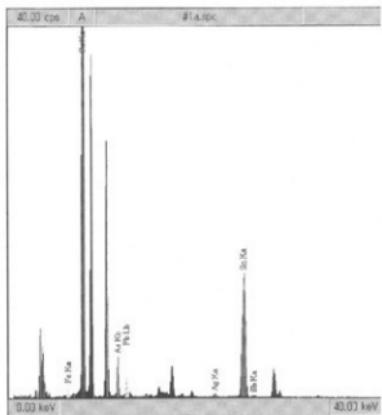


図2 和鏡 分析箇所①のXRFスペクトル

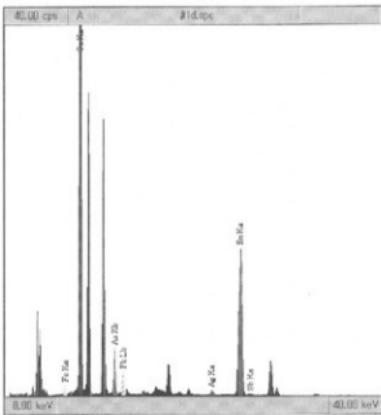


図3 和鏡 分析箇所②のXRFスペクトル

3 金属製品・樹脂質の遺物の成分分析（平成30年度調査）

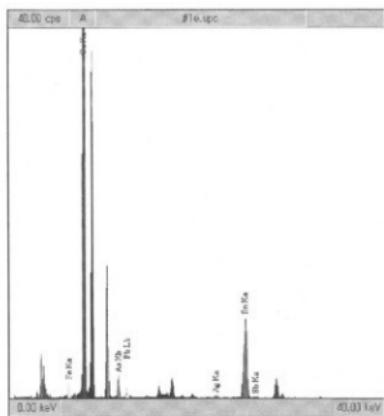


図4 和鏡 分析箇所③のXRFスペクトル

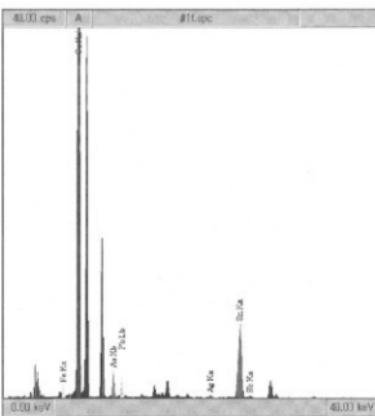


図5 和鏡 分析箇所④のXRFスペクトル

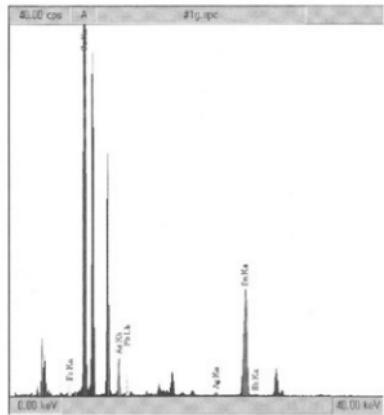


図6 和鏡 分析箇所⑤のXRFスペクトル

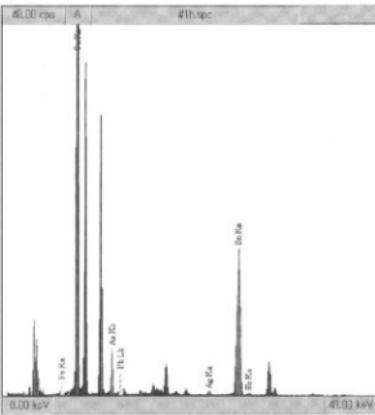


図7 和鏡 分析箇所⑥のXRFスペクトル

2) 飾金具（絞角付鏡座）

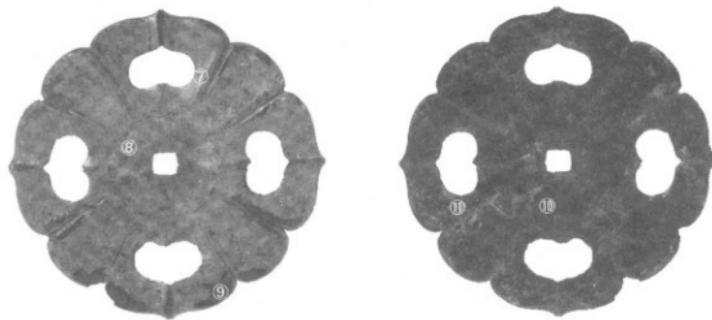


図8 八木沢鉤込II遺跡出土 飾金具（絞角付鏡座）の分析箇所

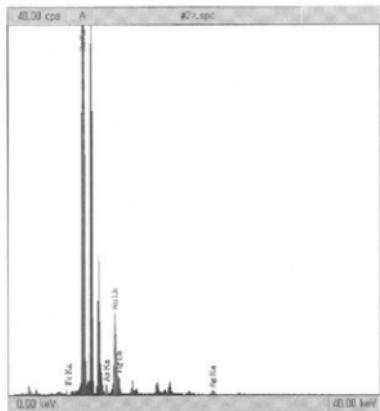


図9 飾金具 分析箇所⑦のXRFスペクトル

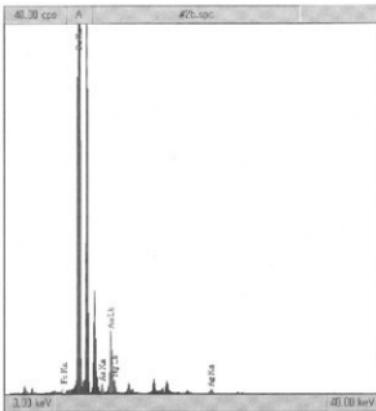


図10 飾金具 分析箇所⑧のXRFスペクトル

3 金属製品・繊維質の塵物の成分分析（平成20年度調査）

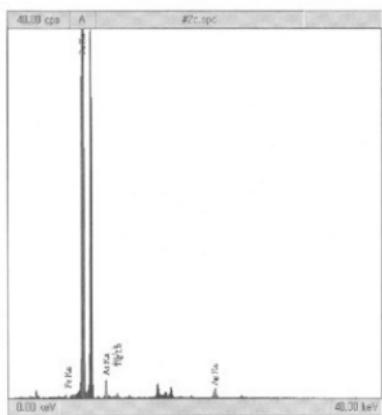


図 11 飾金具 分析箇所⑨のXRFスペクトル

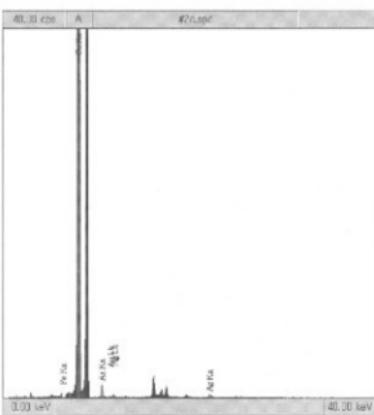


図 12 飾金具 分析箇所㉛のXRFスペクトル

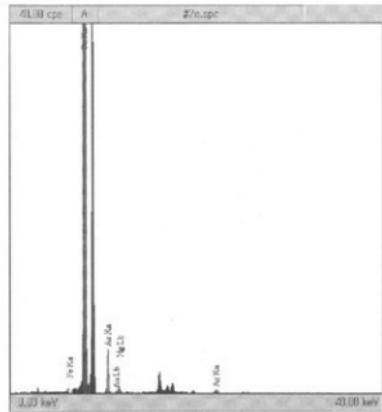


図 13 飾金具 分析箇所㉚のXRFスペクトル

3) 和鏡付着纖維状物質

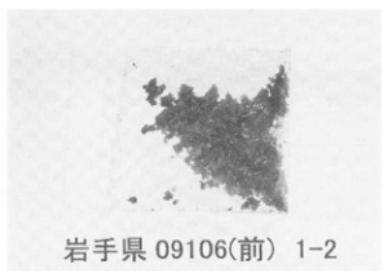


図 14 和鏡付着纖維状物質（繊片）

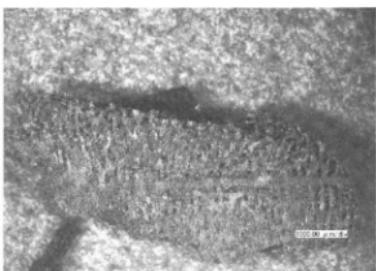


図 15 和鏡付着纖維状物質の実体顕微鏡像

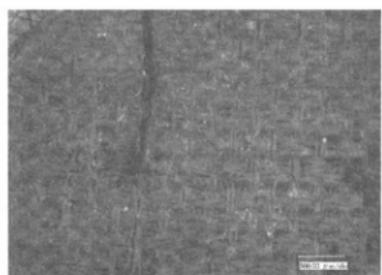


図 16 純粋状物質の実体顕微鏡像

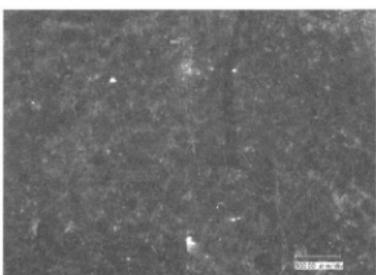


図 17 黒色膜の実体顕微鏡像



図 18 純粋状物質のATR-FTIR

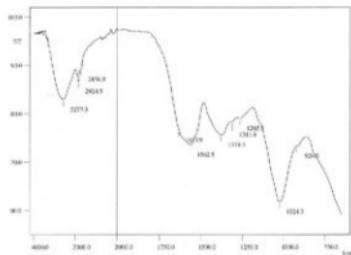


図 19 黒色膜のATR-FTIR

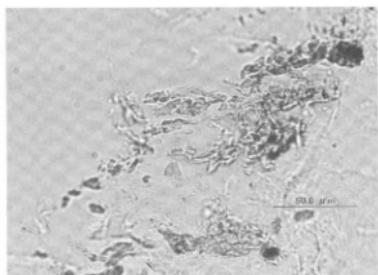


図 20 繊維状物質の断面写真

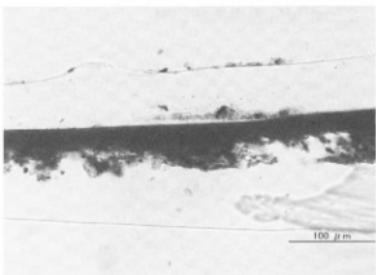
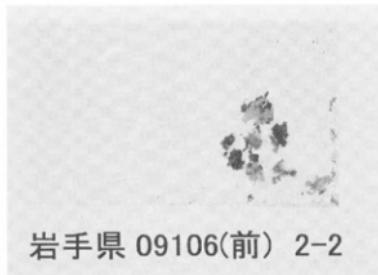


図 21 黒色膜の断面写真

4) 飾金具付着繊維状物質



岩手県 09106(前) 2-2

図 22 飾金具付着繊維状物質（細片）

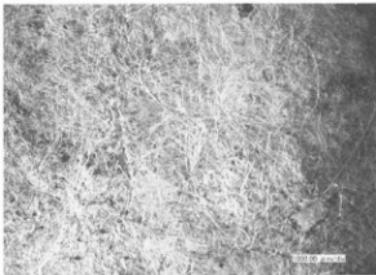


図 23 飾金具付着繊維状物質の実体顕微鏡像

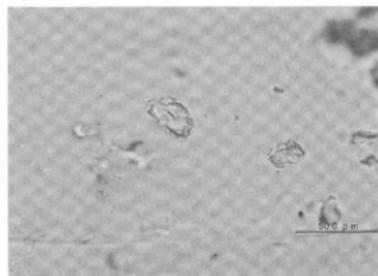


図 24 繊維状物質の断面写真

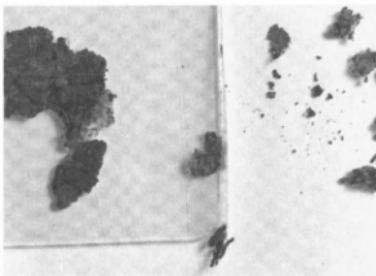
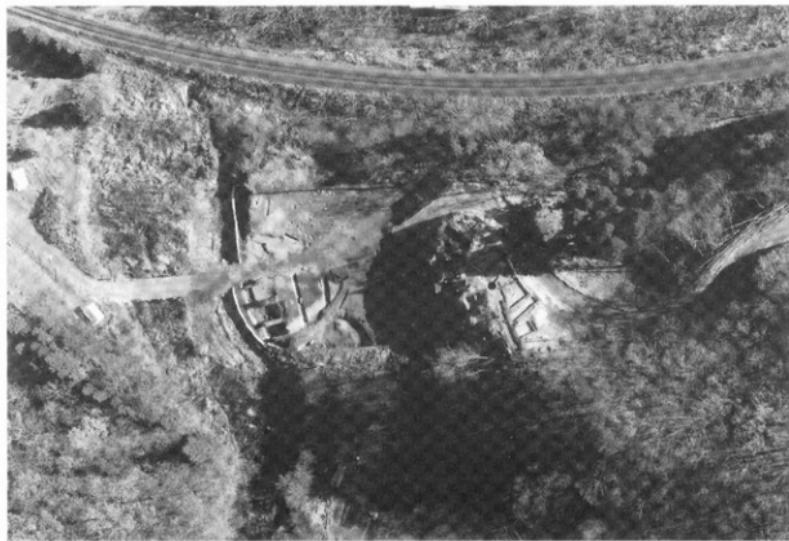


図 25 飾り金具付着繊維状物質の赤外線写真

写 真 図 版



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）

写真図版1 調査区全景

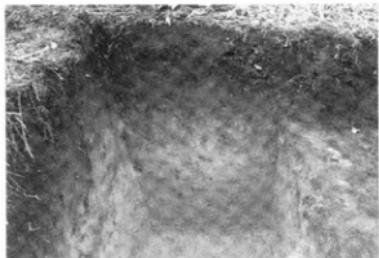


調査前の様子（北から）

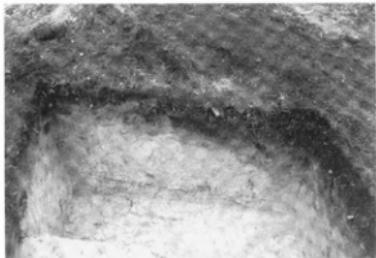


調査後の様子（北から）

写真図版2 調査区の様子



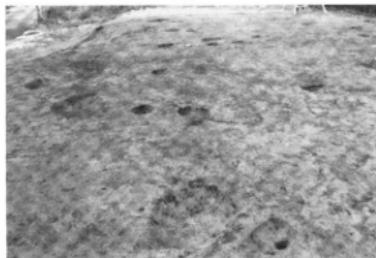
1区基本土層①断面（東から）



2区基本土層②断面（東から）



1区柱穴状土坑平面（南から）



1区柱穴状土坑平面（南から）



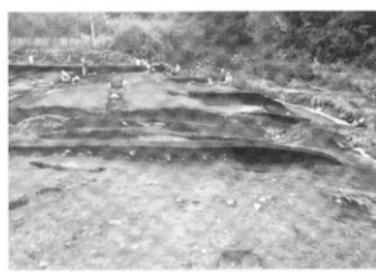
トレンチ1・2平面（北から）



トレンチ6・7平面（東から）

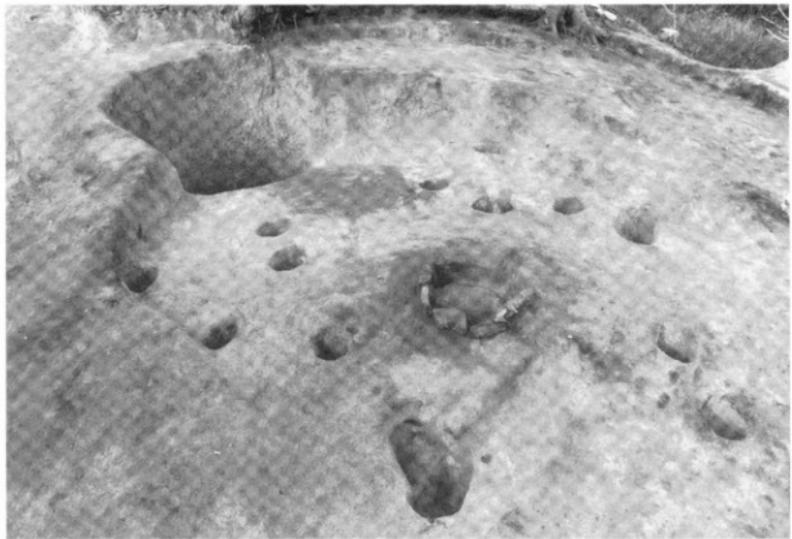


1区西側落ち込み断面（西から）



1区北東側落ち込み断面（東から）

写真図版3 基本土層、トレンチ



平面（南から）



断面A—A'（南から）



断面B—B'（東から）

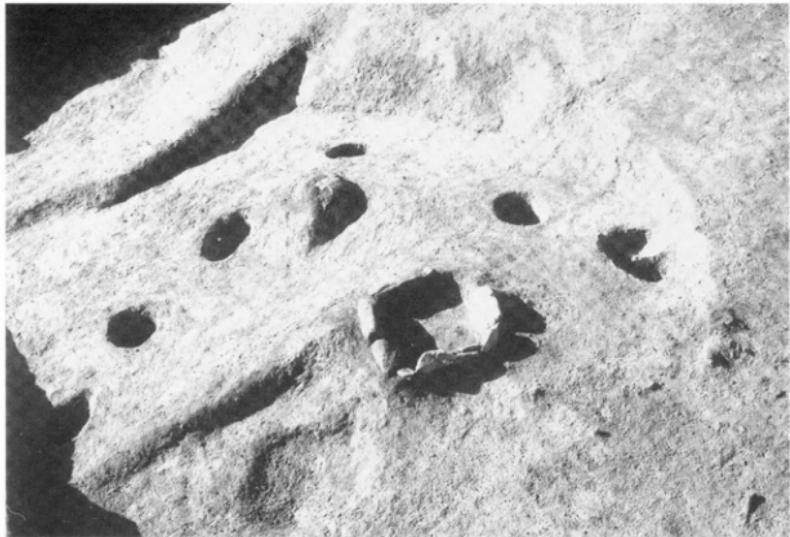


炉平面（東から）



炉断面C—C' ②（東から）

写真図版4 SI01竪穴住居跡



平面（南東から）



断面A-A'（南から）



断面B-B'（東から）

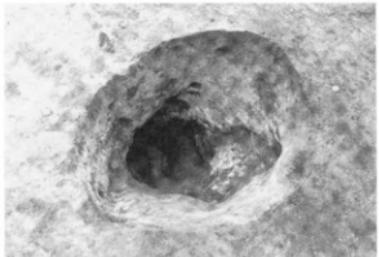


炉平面（東から）

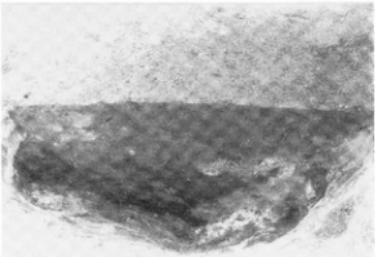


炉断面D-D②（東から）

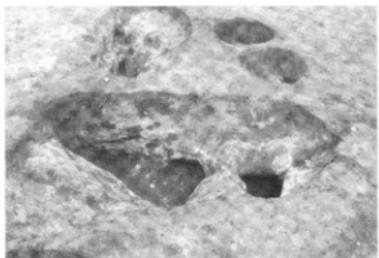
写真図版5 SI02竪穴住居跡



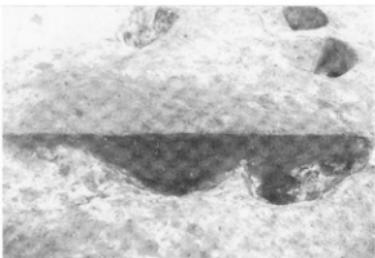
SK01平面（東から）



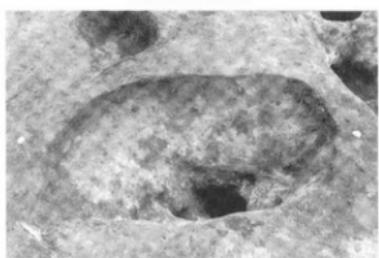
SK01断面（西から）



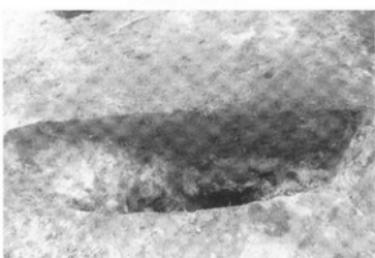
SK02平面（東から）



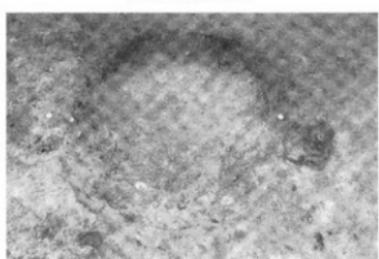
SK02断面（南から）



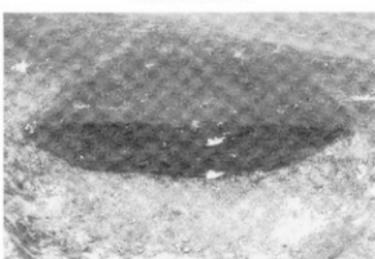
SK03平面（東から）



SK03断面（西から）

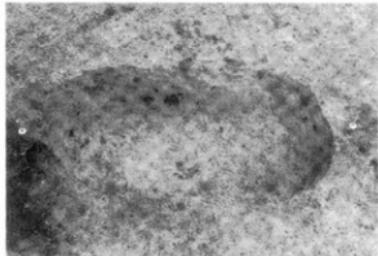


SK04平面（南から）

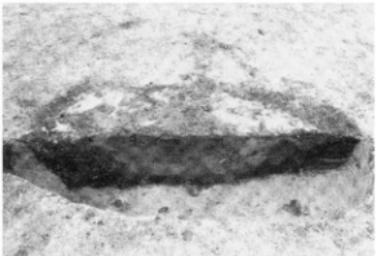


SK04断面（南から）

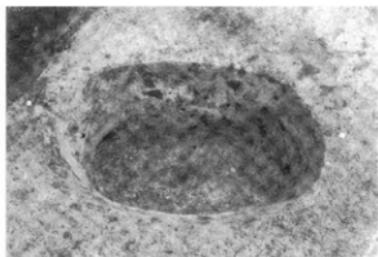
写真図版 6 SK01～04土坑



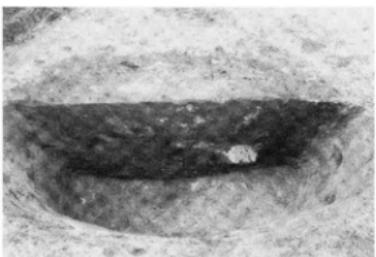
SK09平面（南から）



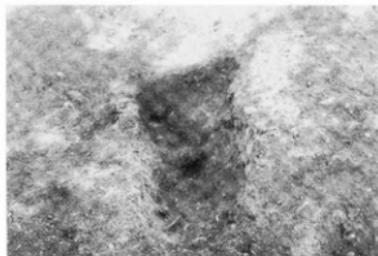
SK09断面（南から）



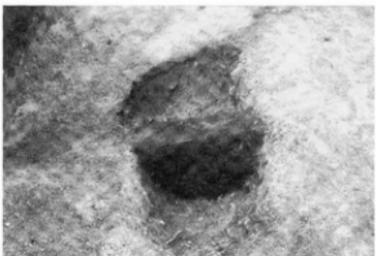
SK10平面（南から）



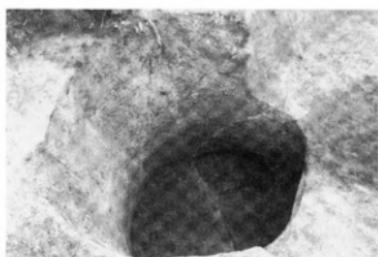
SK10断面（南から）



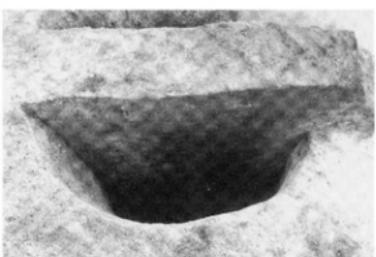
SK12平面（南から）



SK12断面（南から）



SK14平面（南から）



SK14断面（南から）

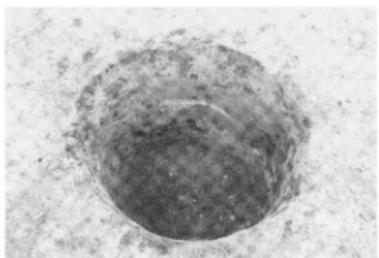
写真図版7 SK09・10・12・14(1) 土坑



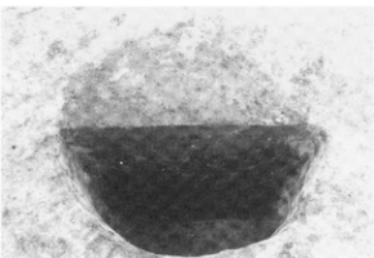
SK14・19平面 (西から)



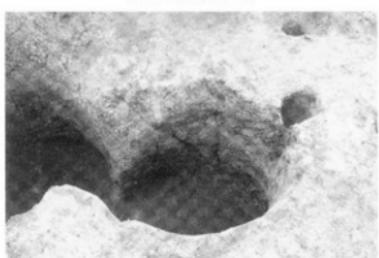
作業風景



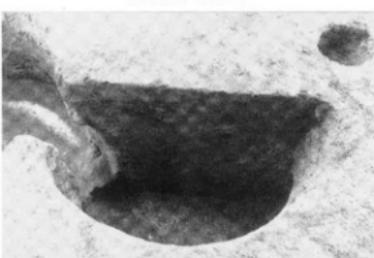
SK18平面 (南から)



SK18断面 (南から)



SK19平面 (南から)

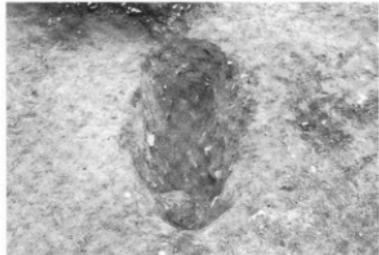


SK19断面 (南から)



SK19遺物出土状況 (南から)

写真図版 8 SK14 (2) ・ 18・19土坑



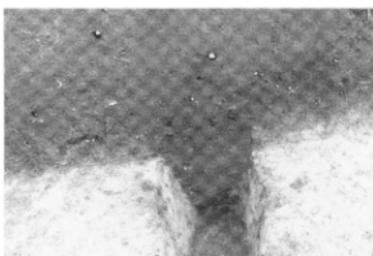
SK05平面（西から）



SK05断面（南から）



SK06平面（東から）



SK06断面（東から）



SK07平面（南から）



SK07断面（西から）



SK08平面（南から）

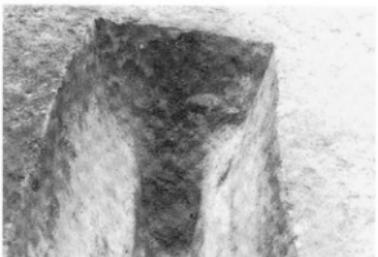


SK08断面（南から）

写真図版9 SK05~08陥し穴状造構



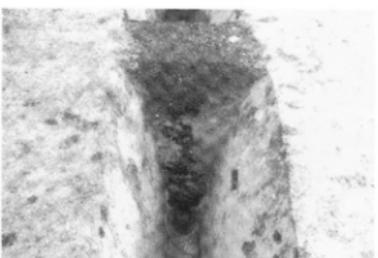
SK11平面（西から）



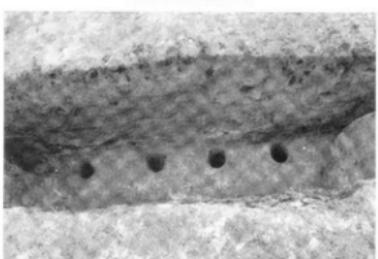
SK11断面（西から）



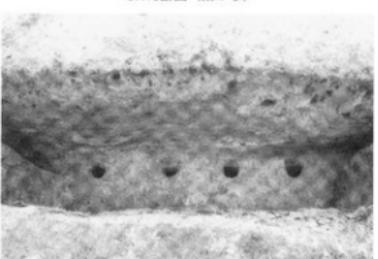
SK13平面（東から）



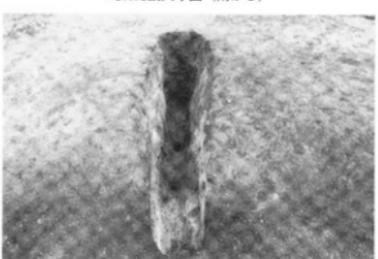
SK13断面（東から）



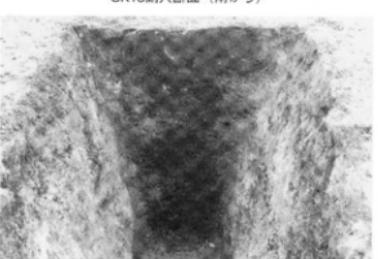
SK13剥穴平面（南から）



SK13剥穴断面（南から）

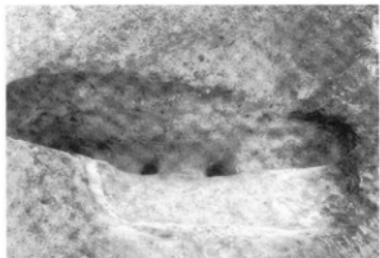


SK15平面（北から）

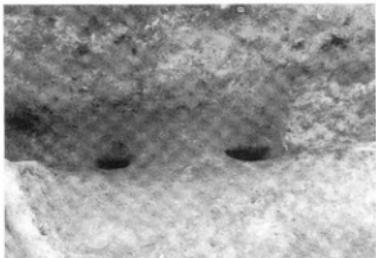


SK15断面（南から）

写真図版10 SK11・13・15(1) 陥し穴状構造



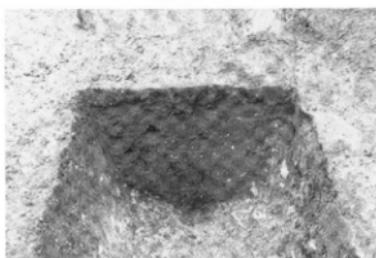
SK15副穴平面 (東から)



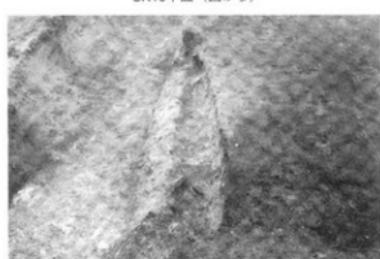
SK15副穴断面 (東から)



SK16平面 (西から)



SK16断面 (西から)



SK17平面 (東から)



SK17断面 (東から)

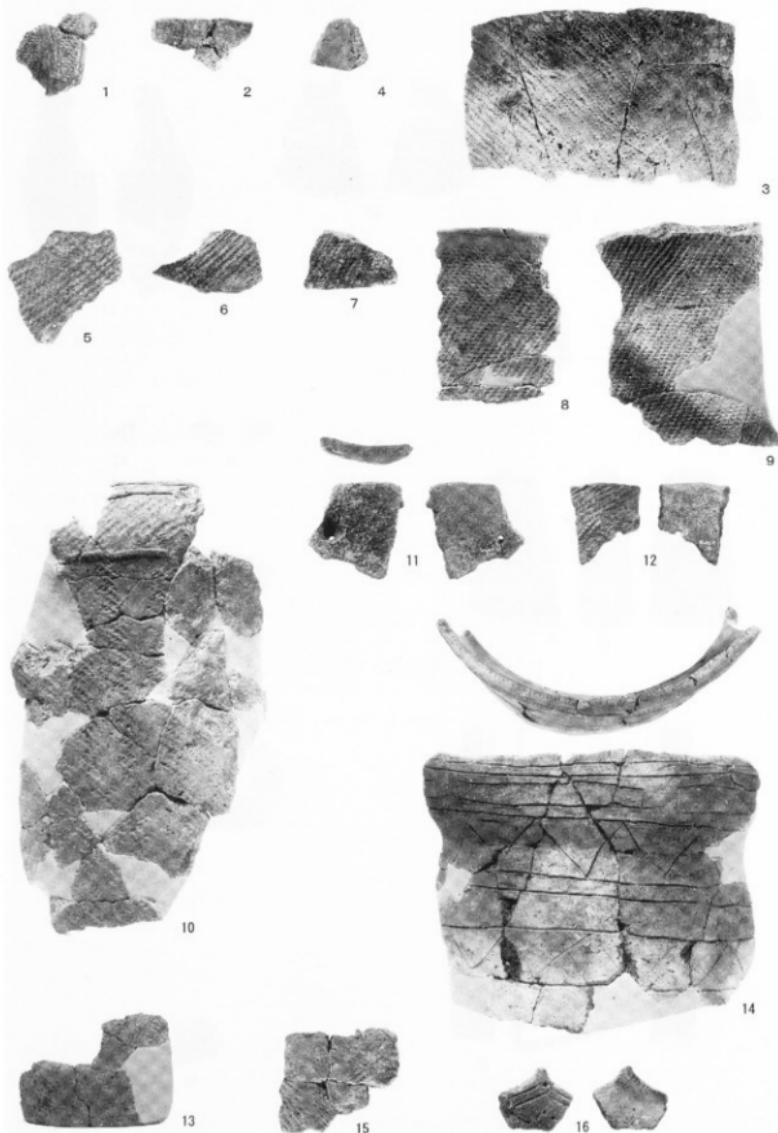


SX01平面 (東から)



SX01断面 (南から)

写真図版11 SK15 (2)・16・17陥し穴状遺構、SX01落ち込み



写真図版12 土器



写真図版13 石器、陶磁器、金属製品、鉄滓類



遺跡遠景（南西から）



調査区全景（南から）

写真図版14 調査区全景（1）



調査区全景（西から）



調査区調査前現況（南から）



調査区調査終了後（南から）



尾根部調査前現況（北から）



尾根部調査終了後（北から）

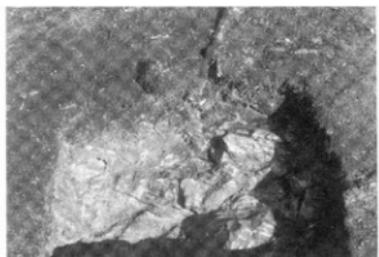
写真図版15 調査区全景（2）、調査前現況（1）



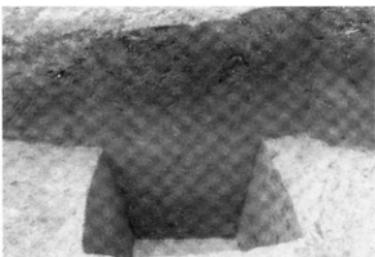
東谷①調査前現況（南から）



東谷①調査終了後（東から）



VAグリッド尾根基本土層①断面（南西から）



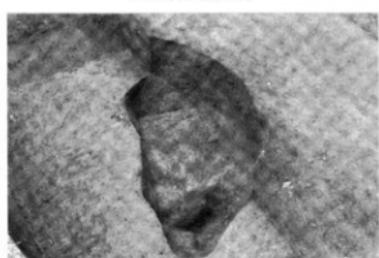
西谷（T109）基本土層②断面（東から）



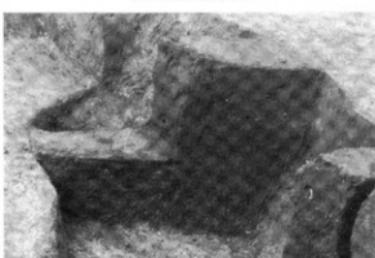
T109平面（東から）



T119平面（東から）

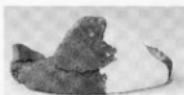


SK20平面（南東から）

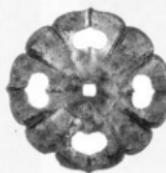


SK20断面（東から）

写真図版16 調査前現況（2）、基本土層、SK20土坑



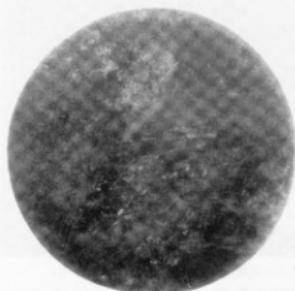
61



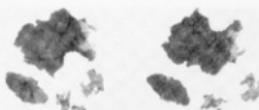
63



62



64



65

第21表 繊維質の遺物観察表

(微鏡) : 現存部

試験 No.	分類 No.	海綿 N.	出土地点 N.	部位 N.	面種 N.	計測値			重量(g)	素材	特徴	時期
						長さ	幅	厚さ				
17	64	トレンチ153	1透表土	柄物	—	—	—	—	—	紡布	鉢底3a625前の表面に付着、分析試料901	12世紀
17	65	トレンチ153	1裏表土	底物	—	—	—	—	—	植枝	鉢底3a625前金具の表面に付着、分析試料902	12世紀

写真図版17 土器、金属製品、繊維質の物質



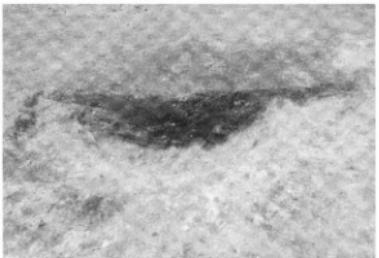
遺跡近景 (南から)



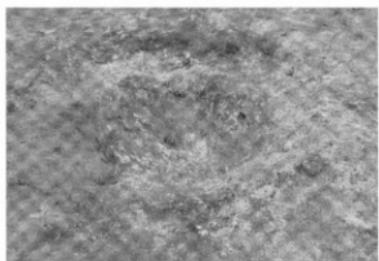
遺跡近景 (東から)



山頂部平面 (東から)



土坑平面 (南から)



土坑平面 (南から)



斜面部調査状況 (南から)

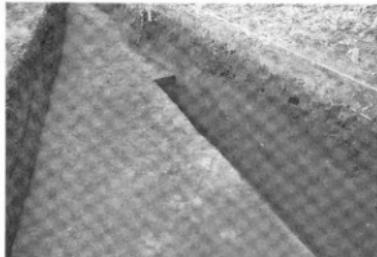


斜面部中央の検出面 (北東から)



斜面部調査状況 (東から)

写真図版18 山頂部、斜面部



斜面部中屢面の上下で（南から）



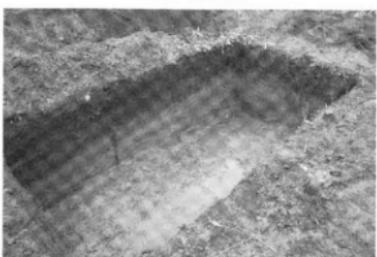
谷部はトレンチ調査を行った（北から）



谷T 2（南から）



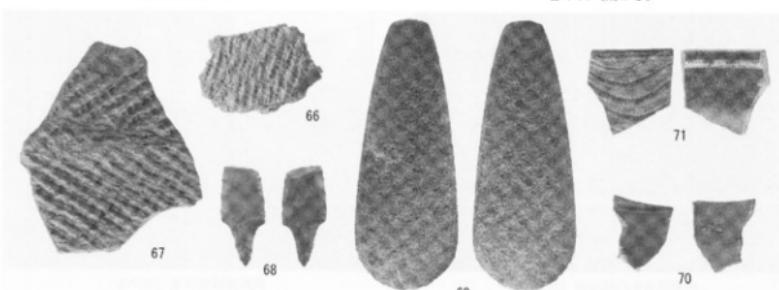
谷T 13（北から）



谷T 18（北から）



谷T 11（南から）



写真図版19 谷部ほか、出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やぎさわこまごめ 2いせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	八木沢駄込Ⅱ遺跡発掘調査報告書						
副書名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第575集						
編著者名	阿部勝則・杉沢昭太郎・八重畠ちか子・青野 梢						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯洞11地割185番地 直 (019) 638-9001						
発行年月日	2011年2月23日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 調査原因	
八木沢駄込Ⅱ遺跡	岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駄込40ほか	03202	LG43-1244	39度36分25秒	141度55分54秒 (平成19年度) 2007.10.30~ 2007.12.05 (平成20年度) 2008.11.04~ 2008.11.27 (平成21年度) 2009.05.25~ 2009.07.03	1,900m ² 2,800m ² 3,600m ²	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
八木沢駄込Ⅱ遺跡 (平成19年度)	集落	縄文時代 中期ほか	堅穴住居跡2棟 土坑10基 陥し穴状遺構9基 柱穴25個	縄文土器、石器、陶磁器、金属製品、錢貨、鐵滓			
八木沢駄込Ⅱ遺跡 (平成20年度)			土坑1基	銅鏡 12世紀の銅鏡、飾金具			
八木沢駄込Ⅱ遺跡 (平成21年度)			土坑1基	縄文土器、石器			
要約	遺跡は八木沢川中流域西岸にあり、山地から伸びる尾根と尾根下に形成された低地からなる。尾根部には縄文時代中期と見られる堅穴住居跡や土坑が検出され、集落として利用されていたことが明らかになった。低地部には陥し穴状遺構があり縄文時代には狩猟の場となっていたようである。南側の尾根では12世紀後半頃の銅鏡や飾金具が出土しており、平泉藤原氏に関わる人々がこの地で活動していたことが推測される。						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第575集

八木沢駒込II遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成23年2月18日

発 行 平成23年2月23日

編 集 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638-9001

発 行 國土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号

電 話 (0193) 71-1716

(財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019) 654-2235

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641-0671

